



550
571



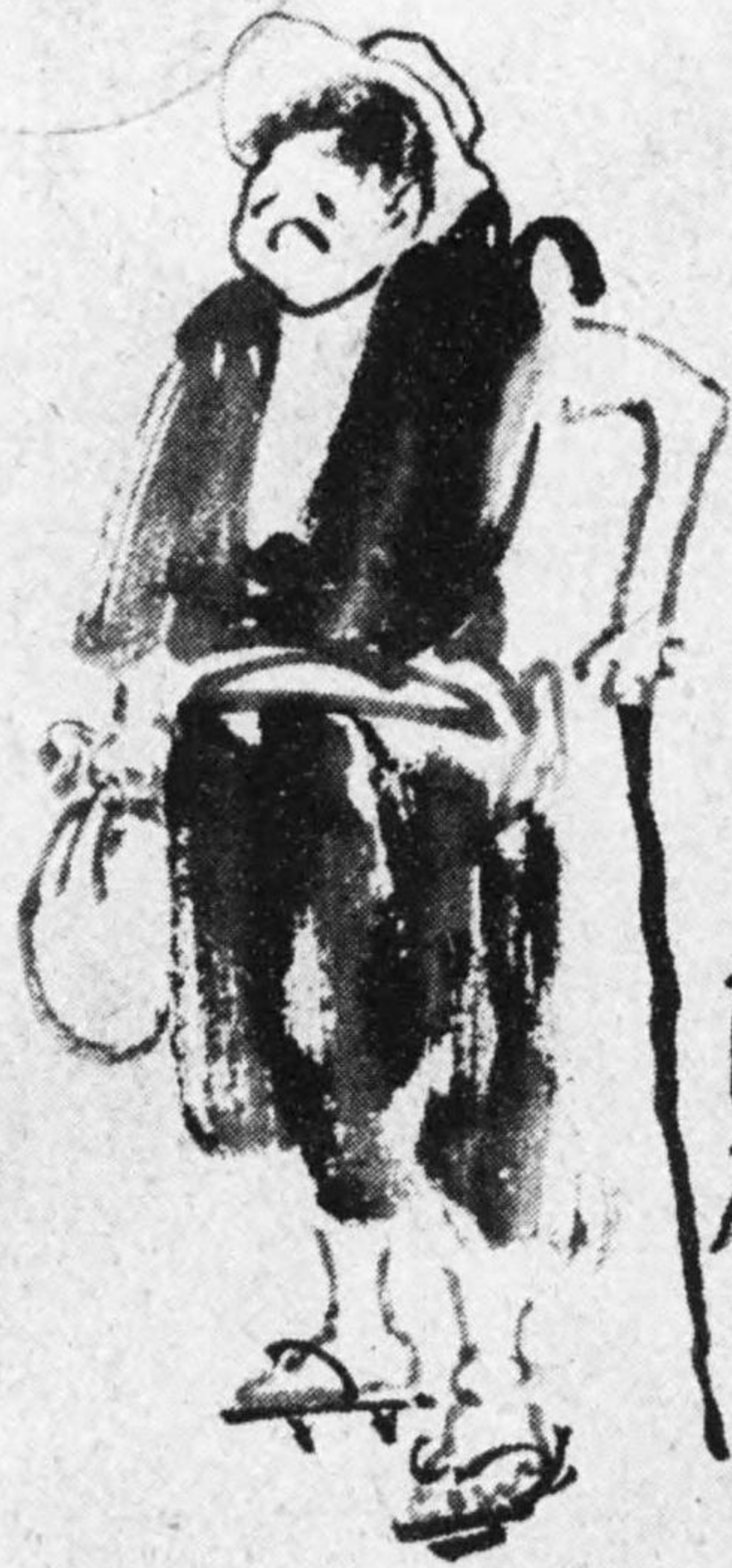
始





毒
上
田
力

大正
15. 10. 11
内交



土田
カキ



550-571

はしがき

大正十二年九月一日の大地震と大火事に我著書一切の紙型は全滅に歸して仕舞つて、おまげに都下の印刷工場また殆ど灰燼となり殆ど能力を失ふた中から復興したのが此浪六全集で、こゝに漸く再び世に出るといふ事は、著者として死んだ子の蘇生した親心から、更に多少の筆を加へて再生の愛兒に着物を着かへさせた點もある。

大正十三年の秋

上田力

其一

窓やぶれて紙に簫の音を聞き廂かたぶいて居ながら月を見るとは古人の風流、黄金か
 がやいて身に光りを放ち美人を擁して寝ながら花を看るとは今人の榮華、いづれか快
 にして人事の性なるべき、かれは浮世を捨てしにあらすして浮世に捨てられたる無用
 の腐れ儒者が悲鳴に等しき窮巷の負け惜しみ、これは志節を遂げしにあらすして浮雲
 の富に乗じたる無恥の當世紳士が夢に等しき泡沫の楽しみ、されど彼も與みせず好ま
 ず是も欲せず羨まずと、風雅でもなく洒落でもなく、また詮術なしでもなく詮術ある
 でもなく、唯これ斯くの境涯は今日かくの志節あるものに應ぜりとして、満都百萬の蔓
 を厭ひながら往來不便の山にも入らず、都の一端に沿うて四季ともに絲竹紅粉の舟遊

力 田 上

たえまなき隅田川の片邊り、日夜大俗の熱鬧を呼び迎へ呼び送る淺草寺の鐘の音を耳にして、汐入村の茅屋に苦學難業を重ねし五人男さても其後いかになりけん、おのく散じて茲に六年、あばれ書生が散々に棲み荒せし古巢は迎も再び人間の用に叶はずとて、家主の阿爺が算盤珠を弾いて思ひ切つたる一刀兩斷の處置に、たゞき潰して大八車二輛の古材木とし、あはれ千住の湯屋に賣り飛ばせし代價わづかに三圓五十六錢、あとの空地は村の小野心家が借り受けて竹の目垣を結ひつゝ、豚小屋とぞなしぬ、夏草や兵どもの夢の跡、豚小屋や豪傑どもの屁の匂ひ、あゝ己ンぬるかな己ンぬる哉、いやしくも當世紛々たる俗書生と志節を殊にして苦學慘澹たる我黨が記念の茅屋、それも自然の風雨に揉み潰されて昔日しのぶの草の露に蟲の音をきくほどの事ならば、また却つて今昔の感ふかく無量の興を催すべき基ともなれど、これは何たる情なや、その形見の家臺骨は再び人間の住家にならずとて凡俗の男女が垢を洗ひ落すべき錢湯

の薪とせられ、しかも劣等動物として醜の醜たる豚の足に踏み汚さるゝとは、遺憾この腸を斷つと叫ぶや否、おもはず大のステツキを振り上げて折しも脚下に來れる豚一頭を打ち殺し、忽ち飼主に捉へられて閉口頓首、やうく一圓の謝罪料を差出して遁け歸りしは誰ぞ、川上にあらず倉橋にあらず黒田吉田にあらずして、例の上田先生力の君が汐入村懷舊の曉を訪ひし時の事なりける、

五人のうちの旗頭として隨一の先輩に推されたる川上三吉は、苦學十年さらに面白からずと一たび都門の風塵を脱却して自己が故郷なる紀州熊野の奥に立歸りつゝ、あたら有爲の生涯を我から抛つて、あはれ猪猿を相手の獵師に身を終らんとせしが、こゝに上田力が満身の友誼と雙眼の熱涙に引き出されて再び世俗の人となり、しかも曾て汐入村に情を贈りし濱町の紳士富田正次に見込まれ、その愛嬢が花の如き容姿と珠の

如き心の^{こころ}に迎へられて竟に其家の婿となり、かの黒田健次は例に依つて例の怪物、立退狀一札を壁間に張り付けて紅塵百尺の眞只中に飛び出せし後は、殆ど半狂亂に等しき闇雲飛び乗りの本藝その身の利となり害となりつゝ、得失こもく、浮世の風浪に漂うて成敗いまだ定まらぬのみか、お島といへる丸ほちやの世話女房を携へて偕も其後いづこに何をやるらん、野心勃勃々、あたるか中らぬか鐵砲丸と等しき本性に引替へ、これはまた小心翼翼たる倉橋幸藏、その始めは新聞の論説家として世に立たんとせしが、一朝さらに轉じて官海の人となり、今は若手の高等官中に其名を知られ、五人のうち年少者たる吉田雄藏は富田家の食客たりしより、川上が婿となりし後は優に學資を與へられて今なほ孜孜たる法學生となりぬ、されば以上四人いづれも往く道は異なれど、まづ志のあるところを歩みつゝ行ひし中に、たゞ一人こゝに上田力は昔ながらの上田力なりける、

身材五尺七寸、うまれながらの筋骨あくまで逞しくして二十三の曉は體量すでに十九貫目に及び、膂力よく普通の男四五人に敵し健脚また日に行くこと二十餘里、頭髮は太く逆立ちて幾度か梳れども櫛の齒に從はず、黒漆に似たる濃き眉の下に圓かなる兩眼を光らして、怒れる肩は山の如く、張れる腰骨は臼の如く、三冬の嚴寒にも東天の空に氷を踏み碎いて冷水を身に浴び、盛夏の炎天にも大道を濶歩して流るゝ汗を厭はず日を避けしことなく、珍味なくとも鹽を舐めて飯を喰ふこと一日一升、與ふれば琉球の泡盛を嗜みて下物もなき大盃に甘露々々と舌鼓をうち、また世間なみくの下戸を驚かして顔色も變ぜず、恰もこれ宛然たる一個の古勇士、風貌の勇健なるは斷崖絶壁を攀ちて猛獸を手捕にすべき勢ひあれども、人知れぬ心の底は處女の如く物に感じ小兒の如く事に泣きつゝも、天真爛漫の性をりく、自然の滑稽を帯びて俗人の意表に出で、光風霽月に等しき胸中おのづから凡人に飛び放れて高く清し、しかも浮世の

萬事に疎くして當世名利を追ふの術なければ沈思黙考して一條の道理を求むること敏く、おのれが所信を執つて動かざること盤石に似たれど、忽ち過つて改むること水の流るゝが如く、憐れむべし斯好漢不幸にして五百年以前の人たらず、いたづらに邪智奸才の横行せる今日の俗界に生れて所謂當世才子がために愚物とせらる、されど愚は其愚を守りて才を恃める才子を瞠若たらしむる事あり、
 上田力、元來この性をもて二十五の曉いづこに當世の家をなすべき、おのれが故郷なる備中の山奥より荷ぎ出せし手製の大ステッキ、もしこれを自己が性に反せる當世俗物の眞向額に打ち込まずんば、當世俗物が談笑の間に含める陰險の毒刃をもて竟に殺さるべき男、たゞ幸ひにして殆ど世塵の外に等しかりし汐入村の苦學難行に伴ひ、今また川上三吉が敬愛の下に保護せられて生を保てばこそ、
 とところは兩國橋を渡りて本所小泉町の裏屋ながら、仕入の花簪を内職とせる老夫婦

が二階を借り受けて只一人自炊の氣樂さ、月々十五圓を贈り來る川上が芳志は厚く受くれど、そのうちの三圓内外は毎月の餘分とて必ず返しつゝ、さらに心は萬金の豪奢に譲らざる意氣軒昂、をりく三尺四方の二階窓より長髯なき關羽に似たる赤ら面を差出して、悠悠たる蒼空を見上げながら何をか快と叫び、また遙に蟻の如く往來せる大道の俗物どもを見下して何をか奇と叫びぬ、

其二

心こゝに疚しからずして大なれば際涯なき天地これ我物なり、人間たとひ手足を伸ばせばとて疊一枚を出でざれば身を置くに六疊の二階住居は餘りあり、さるを紛々たる當世の俗物みだりに志を得たりとて何をかする、汚れたる浮雲の財を抱いて日夜危懼せる胸中は間斷なき煩惱に責められて轉輾煩悶しながら、いたづらに浮世の虚飾を

争うて本邸の別荘の妾宅のと騒ぎまはる見苦しさ愚かさ哀れさよ、金谷園裡の春の榮華も野に咲ける一輪の草花に及ばざるを知らずや、近くはあの兩國橋を渡るもの日に幾千萬、されど其中に一人の我と等しき無垢清淨の男やある、皆これ醜惡の形づくりて動けるもの、天下通用の金銀を多く得んがために奔り、火に焼かば忽ち灰となるべき家庫を得んがために狂ひ、萬人一様、裸體を蔽はんがために衣服の美を競ひ肥馬輕車の有無を誇る、まして日夜もろくの犯罪を發けば必ず鏡花水月に等しき戀の奴、嗚呼なんとやら浮世は嫌なり、願はくは此一身の形骸を早く脱して心意の活動のみを長く萬世に残し、しづかに冷かに中有より下界の利害得失を試み人間の成敗消長を見物したしと、其日は既に暮れ果て、夜に入れども上田先生さらに默念として火をも點さず、夕飯の腹加減を忘るゝにあらねど今となつては頗る面倒なりと、まッ闇がりの二階に唯一人ほつねんと先哲めいたる折しも、梯子段に人の蹙音して、

「やア上田、居るのか、居ないのか」

聲は正しく其人と知りながら、上田いよく平然たる體、筒先の弱りし流れ彈丸の如く暗闇の中より靜に聲を放つて、

「川上だな、は、は、當時の社會すでに暗黒たるを知らば何ぞ俄に此二階の暗闇たるを怪しまんだ、乞ふ手探りに這ひ寄り給へ、しかし梯子段を踏み外して落つべからず、御用心々々々」

「これさ、戲談を止して火を點けんか、石油が無いのか」

「石油もありマッチもありだがね、つい夕方から考へ込んだ事があつて其まゝ今に及べりさ、ぢやアまづ世俗に従うて卑しき人工よりなれる眼前の光明を放つべしかしいひつゝ二分心の豆ランプに火を點せば、川上三吉なほ梯子段より首のみ差出して笑を含みしが、やうく上り來りて坐しつゝ、

「何を考へて居るのだ、また例の通り自己流の哲理かね、その哲理も宜いが、時に今夜ア少々君に相談があつて来たのだから、ゆるく話さうよ、しかし夕飯は、まだか、今ごろまで随分ひどいね、一升飯の君にして能く腹が持つよ、それなら何か美味いものを持って来れば宜かつた、實は今日、君に来て貰ふ筈だつたがね、ごたくと家族の多い家だから却つて迷惑だらうと思つて散歩かたぐさ、ぢやアこれから何處か奢らうかね」

「いや、それに及ばん、飯は一升五合の土鍋に猶いまだ三分一より少からず二分より多からざるの間を餘して副食物には金山寺味噌、ちよいと失敬するよ」
 いひつゝ、片隅より大の土鍋を取り出して書物箱の間に忍ばせし箸と茶碗、竹の皮包みよりは金山寺、前なる机を膳として脇目も觸らず茶も吞まず、肩を怒らし肱を張り大口あいて、むしやくくと喰ひ始めたる上田が面體、行脚の貧僧が思はぬ他國の食に逢う

たるが如し、

なみくの男ならねば満面かくるゝほどの大茶碗に山の如く盛り込んで六七杯、もとより其間は無言、ぱりくと嚙む古澤庵の音を最後として、やうく箸を措き火鉢にかけたる土瓶の腹を掌に試みつゝ、やア湯が微温いと俄に摺り寄りながら、さらぬも不出來の面を膨らして一息に火を吹き立てたる灰神樂、ばつと散れば川上おもはず顔を反けて、

「ひどいね」

「わづか火鉢一個の灰神樂に驚いて、さすがの男おもはず袖屏風の優しい風情、嗚呼いつの間か貴公子めいたぞ、但し可憐なる妻君の命によるか、はッはッはッはッ時に細君、近來どうだ、この半月ばかり無沙汰した、あつお清め相變らず不嬋娟として益々壯かね」

「は、は、は、は、妙なところで一本まるられた、妻もね、平常から君の事を氣にかけて居るよ、大體、今夜の事なンざア妻が第一の發起者となつて阿舅と僕と相談の上から来たのさ、また君は、いつもよく清の事を聞くが、あの清は餘ほど御意に叶はんと見えるな」

「なアに他人の下女だもの、僕が氣に入るの入らないのといふ理由もないが、彼女は汐入村以來の剛敵で、それ、今の細君たる芳子嬢が君に意あつて吉田に扇子たのみの一件によ、僕が進物の菓子を取取して扇に偽筆路顯の時、彼女が憤怒の氣焰萬丈、實に當るべからざる勢ひだつたぜ、だまれ下女こりや下女、富田の下々女め濱町河岸の棒杭め、天下の豪傑に向つて無禮至極、だまれ控へろ、退れと睨みつけたが、彼女なかく黙つて退らない、こゝを大事と眞丸に盛り上つた練馬大根の膝を進めて、さア貴方上田さん、おやく何ですえ、いくら睨んだつて怖かア御坐いません

よ、貴方の顔が怖くツちやア鬼瓦のある物干へ上れませンワ、ほ、ほ、と笑やアがツたから、畜生、笑つたな棒杭めといへば、河岸の棒杭が笑ツちやア石垣が崩れますよ脚下の御用心なさいと吐した面相の物凄さ、其後これが基となつて、をりく富田氏を訪ふ毎に、あいつ女が居ると何だか氣になつて落ち付かないよ、現に親友無二の君が其家の郎君となつてからでも、彼女が僕に對する舉止動作の穩かならざる、さアといやア忽ち飛び込み來つて組打でもする勢ひで、變に妙な氣味の悪い面をしやアがるからね、しかし芳子嬢が多年腹心の下女として今は正しく君等夫婦の閨中に事ふる直參、敢て上田力が其間に毀譽を挿むの意ではない、だが小癩に觸るよ彼女は、つい過日も僕が君を訪うた時、折あしく彼女が立關へ取次に出でて曰くさ、おや本所の厩様これは入らツしやい、しかしお生憎さま、若旦那は御不在ですよ、お出先も分らねば御歸宅の時刻も分らず大旦那はお癩氣で奥様は御風邪、ほ、ほ、

いはゞ自己が家の中で書齋を代へるやうに、宜いぢやアないか來たツて」
 「その心易いが竟に心易からざる浮世の常、その手軽いのが他日の手重くなるべき端緒だ、上田力かく月々の恩恵をうくる事も、かの富田正次より直接なら御免を蒙るね、たゞ我性を知り我愚を憐れみ我志を疑はずして多年刎頸の友たる君が手よりの恩恵なればこそ喜んで受けるのさ、渴して盗泉に水は飲むが、飢ゑて刃りに他人の食を乞はざる上田力、こゝが即ち當世人たる能はざるの頑冥、こりやア殆ど僕の宿痾だね、はゝゝゝゝゝ」

「そこは分つてるよ、わかッてるよ、今更言はなくツても宜いさ、しかし君、よく考へてね、君と僕と交際するの以前、すでに阿舅たア知合の間だらう、また今日この三吉が妻となつて居る富田の娘は、かつて君が郷里にあるころ、學校よりの歸途に誤ッて殆ど水死センとするを助けた君だらう、ね、そこで、富田正次の父子がために

君は正しく再生の恩人だ、まして今この僕が其父を舅に持ち其子を妻に持ッた今日、一家族相議して聊か君に報いむとするもの、さらに恩惠的にあらずして義務的ともいふべきだ、敢て他なし、たゞ君をして長く此窮巷に居らしむるは我々が心に濟まない事と、まづ斯ういふところから迎へに來たのさ、もし來た上で嫌なら、また直に歸るさ、わかッたか」

「なるほど、よく分ツた、しかし分るほど猶更ら行かれないよ、たゞ謹んで淺からざる君が一家の好意を謝するのみだ、願はくは僕の頑愚を一笑に附して今まで通り、此まゝ頼む、はゝゝゝ、第一あのお清大明神が恐れるよ、かつまた上田力いかに野暮漢といへども人間凡夫の悲しさ、木石ならぬ耳目に君等夫婦が日夜の喃々を聞かされて堪るものか、はッはッはッはッ」

川上の心中、角を矯めて牛を殺し翼を作ッて鳥を害ふの愚に倣はずと雖も、この上田

を家に迎へて朝夕談笑の間に其性を和らけ其意を慰め、近來しきりに傾かんとする極端の人生觀を打破し、おもむろに導き靜に伴うて取捨折衷の勞を取らんとせしが、頑として應ぜざるのみか、なほ此上に強ふれば月々の贈與をも謝して去らんとする勢ひに、流石の川上も持て餘して苦笑ひしながら、

「ぢやア今夜の事は互に言はず聞かずとしよう、いゝかね、時に明日の晩ちよいと來ないか、夕飯を食ひ旁々、過日あるところから貰つた小鳥の味噌漬で」

「行かう、さういふ簡單な好意なら何時でも辭せずよ、必ず行く、が、まてよ、あすの晩か、いや〜その時の都合にするから待たずに居つてくれ、用意なにか仕ちや〜困るよ、たゞ飄々浪々、進退に依つて心を煩はさず出入に際して時を定めぬが僕の不文法だから、は〜、は〜、は〜」

「どうしても相變らず君だよ、ぢやア歸るから、なるべく明日の晩ね」

「よし〜今夜の僕アまづ行く覺悟だが、あすの晩の僕は保證の限りにあらずだよ、歸つたら細君に宜しう」

「しかと申し聞けまするだ、そして君、あすの晩に來るなら一泊の覺悟で來るべしだよ、は〜、は〜、は〜やはり獨身は氣樂だね、どこで不意に泊つたつて家に待つものなく恨むものなしさ、あゝ我も竟に斯言をなすの人となりにけりか、水の流れ譬ひ急なるも境は常に靜なり花落つること頻りなりと雖も意は自から閑なりといふ古人の名句に恥づべしだ、は〜、は〜、は〜」

其三

あすの夜は必ず來よとて立歸りし川上の心中、さてはこの我を一家族の中央に押し据ゑて義理づくめに引き取らんとの計略、しかも一泊せよとの深意は飽くまで我を説い

て窮巷を脱せしめんとの芳志、身に餘つて嬉しけれど、我天性そもく、當世一家の組織に對うて圓滿なるべきものならず、されば今の我を救はんとする人々の慈愛は却つて後に我を捨つるの基となり、我また今の慈愛を喜ぶの念いつしか去つて怨恨を抱くの果とならん、人いづれか神ならん、浮世は凡て佛の蓮臺ならずと、上田力、元來の智者ならねど其心に一點の利慾なく邪執なければ自から先見の明あるに等しく、また時に應じ境涯の分を守りて悠々寛々さらに動かざる體は殆ど識者の用意あるにも似たりける、

さればその翌夜も二階の一室に閉ぢ籠りて、薄闇き豆ランプの前に例の沈思黙考、圓かなる眼を半眼に閉ぢ獅子鼻の息を殺して、さながら今戸焼の土達磨を宵闇の棚に載せたるが如くなれど、誰か知らん、このところ先生さらに得意の體、人生もろくの煩惱を脱して貴賤貧富の外に心のまゝを通はせつゝ、をりく白癡が物を拾ひし如く、

唯にやくくと笑ひ、また人なき野原に金殿玉樓を望みしが如く、忽ち眉を擧めて何か怪しむ風情、愚といはんか狂といはんか悟れるか迷へるか、こゝにこの一怪物が端坐無言の折しも、下より宿の老爺が聲として、

「上田さん、お客ですよ」

四條五條の橋の上、往き來ふ人を深山木と見るほどの觀念この我にあれども、奈何せん、近來の俗物は古昔の俗物より温順しからずして無遠慮千萬なるが故、しばく哲人の定坐を汚すの恐れあり、さても今夜の客は何者ぞ、川上ならば其まゝ無言に上り來べき筈と思ふ折しも、また下より老爺が聲、

「上田さん、起きてるんですか寐てるんですか、お客ですよ」

「いや起きても寐ても居らんが、まづ慥だ、ともかくも其客を上げてくれ、出迎ひ大儀といふなア世人の履き違へで、ありやア先方からの挨拶でなく此方から言ふべき

言葉だよ、大儀々々、わけて今夜ア大儀だから客人そのまま、来るべし、全體だれだ、誰だ」

みしくと音する梯子段に誰ぞと見れば、机の上の豆ランプに照らされて二階の上り口へ、ぬつと差出せし顔は南無三寶お清大明神

「おや上田さん、御免あそばせよ、お客は妾なの」

「やア君、いや君ぢやアない貴様、でもないぞ下女、こりや下女、富田の下女、全體な、何の用だ、俗物も俗物、さらに頗る大々的大俗物めが失敬千萬、け、怪しからんこつた、御免あそばせよ、とは何だ、遊ばせ言葉が似合ふ面かい其面は、もし川上の用なら其處から其ま、言へ、決して上る事ならんぞ、一寸でもセリあけて見ろ畜生、僕のステツキ、こゝにはないが豫てより汝の眼底に映じてある筈だ、さア用事を言へ下女、ば、馬鹿ッ」

まんまるの目に角たて、面を膨らしながら、前なる机に兩の拳を打揃へつゝ、胴より作りつけの太き首骨、ぎゆうと音するばかりに捻ぢ曲けて睨みつくれば、お清も釣り上げられたる河豚の如く盤大面を膨らして、あるかなきかの細き目に巾着口の紐を解いたる勢ひ、

「おや、おや、上田さん、ひどい事を仰ツしやるワ、誰が貴方の許なンぞへ來たいモンですか、御主人の御使ひなればこそですよ上田さん、また妾の顔さへ見ると下女々々ツて、なるほど下女には相違御坐いませんが、これは餘所のお給金を頂戴いたします下女で、貴方の御召使ひとは違ひますのよ、はい、ステツキかビステキかそのやうな御馳走は御無用に遊ばせ、いえもう貴方いたゞきましたも同然、ほゝゝ、ほゝ、馬鹿は深川の名物で大々神樂の大黒様は芝の神明と小石川の傳通院、ほゝ、ほゝ、」

「や此奴また笑ツたな、全體その笑ひ聲が汐入村以來の癩に觸るのだ、えッ大々神樂の大黒ぢやアない畜生、大々的大俗物と言ツたのだ、お丹珍め」

「お丹珍でも宜しう御坐いますから、ともかくも主人の用を申しますワ、しかし此まま梯子段に立ちながらでは餘り失禮、御免あそばせよ」

「また遊ばせよか、こりや下女、そこで宜いから早く用事を吐して歸れ、飄碌玉」

「おやく、今度は飄碌玉ですか、いろんな名をつけて戴いて嬉しいことよ」

「嬉しい事よ、よ、よとは何だ、よとは、そもくよなる言葉は、おいく無闇に上ツて来ちやア不可ンといふに、こゝこれさ下女、怪しからん女だ、こりや下女、家宅侵入といふ事を、あれ、や此女め、づうくしいッてば、不埒千萬、いやしくも、この土田力を」

いへども委細かまはずお清そのまゝ差寄ツて大道白に似たる唇を火鉢の前に下せば、

ことし二十貫目の大男おもはず飛び退きぬ、

あれは元來あんな男、たとひ何をいふとも心に毒なければ勘忍せよと、川上夫婦に言ひ含められたる今宵のお清、口には争へど腹に持たず、そのまゝ進み寄ツて携へし風呂敷より重箱を差出しながら、

「主人が申しました、今夜は是非おいで下さるかお待ち受けましたが、もはや夕飯の時刻も過ぎましたから、前夜お約束のものを届けますツて、これは上田さん、鳴といふ小鳥のお味噌漬ですよ、召上ツて御覽なさい、そりやア貴方、なんともいはれない結構な風味ですぜ、ちよいと今こゝで焼いてあけませうか」

がらりと打ツて變りしお清が俄の愛敬に、さすがの上田も張合のぬけし心地、さりとて今更ら笑顔も見せられねば、一切すべて啞の如く、たゞ無言に首肯のみ、さらば焼きませうかといへば、また無言に頭を打振ツて入らぬ世話との體、果は頭もて其處

へ其まゝ置いて歸れとの眼色に、お清おもはず吹き出して上田の面體じつと見詰めながら、

「ねエ上田さん、貴方と妾とは根からの仇敵同士でもないに、何故まアかうでせう、よくく性が合はないンですね、その證據には、これまで度々いくら喧嘩をしてもあとで考へると呵しい事、お腹の中に何にもないのよ、おや、また、よと言ッちやアお氣に觸るかも知れませんが、眞實ですよ、あらまた、よと言ッたワ、ほゝゝ、ほゝ、若御夫婦が然う仰しやいました、上田は見たところ鬼のやうでも心は佛た、あれこそ今の世の中に珍らしい男だツて、それに清、お前は上田さんといふと、いつも失禮な事ばかり申し上げてさ、幸ひ今夜の使者には是非お前が往ツて、ちきくおわびして来いと、ほゝゝ、それで伺ひましたの、ねエ上田さん、實に只今までは濟まない事ばかり申しまして、しかし此後は屹と心得ますから、どうかねエ上田さん

ほゝゝゝゝ」

ばたりと折れて脚下より出直したるお清が言葉に、元來の一本調子、もはや無言の鼻息で追ひ歸しも得せず、しぶくながら振り返りて、

「わかつた、はやく歸れ」

「おや、それでは貴方、お許し下さいますの」

「さう言はれると僕の方でも、何となう氣の毒ぢや、はゝゝゝ、まア宜いから早く歸ツて川上夫婦に宜しく言ツてくれ、いづれ其うち遊びに行くからツて、時にこの小鳥は此まゝ焼いて宜いのか」

「えゝ其まゝで宜う御坐いますとも、お味噌の味が能く染み込んで居ますから、なんにも付けるには及びませンの、しかし餘り眞黒に焼き過ぎては苦くツて折角の甘味が抜けますよ」

「おいきた」

「さやうなら」

上田そのまゝ、坐も動かず見返りもせぬ耳朶へ、みしくくと梯子段を降り行く楚音、二段三段と思ふころ忽然きやツと叫んで、ごろくばたりどんと響きぬ、南無三寶と驚き起ツて見下せば、梯子段の下にお清が迂り落ちて呻く聲、宿の老爺が駈け寄ツて介抱しきりの體に、そのまゝ、馳せ降りんとして上田また中段より足踏み外し、あツと思ふや否、さらぬも倒れて起き得ぬ脊骨の上へ二十貫の大男どしんと落ち重りつゝ、蛙を踏み潰せしが如く、ぎゆうといはせぬ、

「しまった、みゝ水だ水だ、おい氣を確固に持て、どゝどうだ何うだ、お清君、しツかりしろ」

其四

かつては蓮の葉を頭にいたゞいて炎天の大道を濶歩しながら、日に新にして日々新なるのみか、得るに易く棄つるに惜しからず、しかも自然の美と清涼の風流とを兼ねたる天下一品の我帽と誇りしが、寒風凜冽たる師走の空となりては、流石の男も露冷かなる天下一品に聊か避易しけん、川上より贈られたる鍰廣のメリケン帽を面深に被りて、人は着流し着下すといへども、これは相も變らね布子一點を裾短に着上げつ着吊し、をりく結び目の端を引き出して布巾ともなり手拭ともなる天竺木綿の兵兒帶、晴雨兩用に通ずる枋齒の下駄、用なき左手を懷中に捻ぢ込んで、右手には例のステッキ、梟の如き眼を剥いて重ね袂に似たる肩端を膨らせながら、悠然として立出づる大兵肥満、いづれも歩をとめて見返る中に、柳橋の雛妓三四人が舞踊の稽古がへりに

見上げて、ちよいと御覽よ、萬一あんな人に惚れられたら妾どうしよう、いッそ死んだ方がましだワ、

上田力、ふと小耳に挿んで、畜生、ふざけた小女郎だ、まだ人間卵子の殻を出たばかりの分際で、はや既に惚れる膨れると吐す、まして白日青天の下に堂々たる一個の偉丈夫を見掛けて、ちよいと御覽よ、あんな人とは何たる氣焔ぞ、いッそ死んで仕舞はんといふに至っては一言ふかく他日の慨を知るに足る、蛇は寸にして其氣をあらはし、彼等いまだ乳臭くして紅粉の巷に馳驅せんとするの勢ひ、なるほど、やがて浮世の俗物どもが膽魂ひんぬかれて戀の奴となるも大に所以ありだ、紛々たる今日、當世の少年に彼女等ほどの氣概なし、恐るべし怖るべしと思つて振り返れば、三人の雛妓は家鴨の雛に等しく小さき尻を振つて遁け出しぬ、

兩國橋を渡りて川端傳ひに濱町の富田が邸宅、眞正面の立關に向つて、

「たのもウ、川上は居りますか」

いつも家内に鳴り響くは問はずと知れし其人と、まづ奥へ通ずれば、すぐ案内せよとのことに、取次の小女いでて此方へといふ、上田しづかに首肯いて此時やうく懐中の左手を取出しつゝ、おのれが家に歸りしが如く、ずつと打通れば、折しも若夫婦は火鉢に差對うて何をか睦しけの體、

「やアこれは失敬、差支はないかね、どうやら唐突に神聖を犯したやうだね、かまはないか」

川上ふりかへりて、例の洒々落落、は、と笑へば、妻の芳子も今年二十一、いつしか浮世馴れたる女房氣取に良人が無二の親友を迎ふる如才なさ、

「おや上田さん、よく入らッしやいました、さアずつと此方へ、これ誰か、お坐蒲團を持ッておいで、ついでにお菓子もよ」

「馬鹿ア言へ、觸つたどころか總身ぐち叩きつけて、ぶんなぐつたよりも酷いのだ、しかし大した怪我アなくって互の幸福よ、もしあのまゝ不具にでもなつて見ろ、いかに退失とはいひながら、あはれむべし女一人の生涯を虐けたも同然の君だぜ、是非その不具どのを君が女房に持たすンばあるべからざるところだ、どうだね、あの清が不具となつて君に連れ添うた曉は、頗る奇だよ、妙だぜ」

「やアたまらないね、はゝゝゝゝ」

をりしも芳子が立歸りて襖の彼方に手を支へながら、

「それでは上田さん、甚だ見苦しくつて失禮で御坐いますが、どうか一度、見舞つてやつて下さいまし、本人は決して其事に及ばないと申しますが」

「承知、案内して下さい」

納戸と臺所の取合なる六疊の一室、これぞ彼が平生の天地かと障子引き開くれば、左右

に壁と押入の正面なる半窓の下に、木綿なれど更紗形の厚き夜具を打被りて、枕頭には水薬と煎薬の外、小さき角火鉢に清水焼の土瓶をかけて茶器と菓子まで取揃へたる體、なるほど世間普通の下女が部屋とも見えすして、奥と臺所の中央に彼女が平生の勢力を想像すべく、我等が本所の二階住居よりは遙に立勝りて、そつと何處やらに白粉氣の匂ふ風情、さすがに女なりけり、これでも人知れず朝夕の用意ありと思へば、

「やアお清君どうだね、實に氣の毒千萬だつたな、随分と養生するが宜い、しかしまづ此分なら」

土中を出でて天日に曝されたる芋蟲の如く、お清やうく肥大の身を蝨めかしつ、枕を擡けて、

「上田さんですか、ありがたう御坐います、なアに貴方、御心配に及びません」

「さうさ、根柢のある病氣といふぢやアなし、殆ど南瓜の蔓が切れて落ちたと一般、

いや、何、その何だ、こりやア失敬、つい比喩が悪かつた、だからよ、ね、すぐ今に全快なるさ、は、は、は、だから暢氣にして冷えないやう、あつたかくするが肝要だぜ、ついでには此ところ何か見舞物と思つたがね、は、は、は、思つたばかりさ、上田だよ、勘忍しろ、おや、枕頭に甘さうな菓子があるな、自費か官費か但しは配下よりの賄賂か」

「ほ、ほ、ほ、いつも罪のない方だよ、よろしく召上れ」

「しかし君が斯う寐て居つちやア、流石に僕だつて、よろしくも召上りかねるさ、は、は、は、時に昨夜は、さぞ痛かつたらうな」

「そりやア貴方、梯子段の二段目から手鞠のやうに、おツこちたんですもの、痛くないことは御坐いませよ、南瓜の蔓が切れて落ちたとは少々違ひますから」
やア失敬々と叫んで上田そのまゝ遁け出しぬ、

其五

一年中の大油断が今この時に押し寄せたりと、はや今年も盡きなんとする師走の世上いづこも同じ脚下の鳥に驚いて俄に狼狽の體を見るに、あはれ一年十二箇月のうち十一箇月の統計よりも唯この一箇月間の犯罪こそ却つて多しとぞいふ、されどこゝに上田先生かの力の君は殆ど曆日なき別世界の境遇、敵に責めらるゝ年末の苦痛もなく、浮世の義理を飾る歳暮の遣取もなく、さては其他の人生もろくの虚飾虚禮は一切すべて關せず焉と、六疊の天地に蟠つて得意の朗吟を恣にし、三尺の机に對うて豆ランプの下に世界の大も廣しとせざる意氣軒昂、その氣樂に引替へて十坪に足らぬ同じ家の二階下には、主人の老夫婦が衣手うすき霜夜の更け渡るまで、たゞ差對うて花簪の内職に餘念なし、

回向院の鐘の音も今日このごろは、わけて無常に鳴り響く夜の十時ごろ、上田おもはず眩を枕に寐ながらの耳敏つれば、きゝなれぬ男の大聲にて何事をか喚く體、しかも主人夫婦が頻りに謝びて泣くが如く訴ふるが如き體、なほよく聞けば不意に押し寄せし債鬼なりける、

天下の經濟と社會公益の事業に要する金銀融通は格別、凡そ個人普通の間には借りて返さぬ奴も悪し貸して厳しく迫る奴も悪し、約束の期限が覺束なければこそ證文に印紙印形の面倒ある世の中、また民事訴訟の執達吏のといふ騒動もある人間、そもく借りるほどの奴に未來の心算を狂はざるものなく、貸して利を取るほどの奴に慘酷ならざる道理なし、あゝ俗界の俗物どもが煩惱火宅の憫れさよと思ふうち、いよく大聲に罵る債鬼の勢ひ、果は何をか取って抛け付けし物音、主人夫婦が狼狽へ叫ぶ聲に、上田力たるもの今は何として安閑たるべき、のそくと二階より降りて見れば四十あ

まりの横髪禿けたる色黒の奴これぞ債鬼ならん、あはれ老の夫婦が三日がけの夜にかけて仕上げたる花簪の大箱ぐるみ引ッ抱へて立去らんとするを、驚き慌て、左右より取纏る體、上田みるより物をもいはず飛び掛ッて、債鬼が兩の肩口ぐいと引ッ掴みぬ、

「やい待て、全體うぬ何者だッ」

元來の大力に掴まれて思はず箱を取落しながら身動きも得せず、たゞ眼を白黒にして蟹の如く泡を吹きぬ、

主人夫婦も心の弱みに今は却ッて上田を慰めつゝ、やうくその手を放せば忽ち圖に乗る下種の勢ひ、さらに大聲あけて叫びながら、

「さア畜生、どうでもしろ腕力づくで人の金を踏み出すのだな、おもしろい、本所深川の場末かけて鴉金の山本といやア人に知られた男だ、地獄の鬼に貸した文久錢さ

へ取はぐれのねエ乃公の金を、踏み付すなら踏み付して見ろ、また腕力づくなら腕力づくで敵手になつてやらア、へ、へ、へ、体格の大きいのが怖くツちやア淺草の仁王門を潜れるかい畜生、ふざけた真似をしやアがるな破れ書生め、もう斯うなりやア意地づく、鍋釜でも抜いて行くのだ、うろく、狼狽へて懸替へのねエ首でも抜かれやアがるな」

いひつゝ、またもや荒れ出さんとする襟首と腰帶とを引ん掴んで、主人夫婦が止むるもきかず、さながら小兒の手鞠を抛つが如く大喝一聲、どツと猪轉抛けに抛け付ければ、かくても曲物あつと叫びながら忽ち大の字となつて、

「さア殺せ、殺せくゝ畜生、殺しやアがれ」

よし殺してやるといへば、飛び損ねたる小田の蛙も一般、片脚あけて踏み殺すも易き奴ながら、さて殺しもならぬ今更の上田力、自暴自棄の大の字なりに喚く面體じろり

と睨んで、をりしも幸ひの火鉢に沸え返る鐵瓶を片手に提げて差寄れば、わツと驚いて忽然むくくと跳ね起きぬ、

「は、は、は、は、馬鹿め、殺せくゝと吐しながら沸湯が怖いと見えるわい、しかし、きさま、當家へ貸した金は幾何だ、十二圓七十八錢、む、よし、ところで其金を僕が立替へてやらうか、但しまた其金だけを腕力づくで返さうか、どうだ、よく考へて返答せい」

いひつゝ、猿臂を伸ばして胸倉ぐいと掴めば、内心ぎよツとして前後二度の大力に驚いたる上、大の字となつて嚇せば面上より鐵瓶の沸湯を浴せんとするほどの亂暴もの、うかく、長居の場にあらずとや思ひけん、とられし胸倉の拳に兩の手をかけながら、「なアに貸した金さへ取りやア別に文句もねえんだが、こゝの老爺があんまり分らねエからよ、ようがす、ようがす、そゝさう手荒くしなくツても、ようがさアね」

「ぢやア十二圓七十八錢で宜いんだな」

「ようがすよ」

「確と宜いか、あとでまた、ぐづくいふと許さんぞ」

「ようがすッてば、しかし今すぐに、全く返して貰へるンですな」

「知れた事いへ、劣等動物に二の矢をつがせるか馬鹿、時に御夫婦、此奴のいふ通り
ですか十二圓七十五錢」

「なに五錢ぢやアねエ、十二圓七十八錢だ」

「は、は、は、この腕で胸倉を掴んだ以上は、生死の境ともいふべき際どい中で、わ
づか三錢の相違を遁さざる奴、や、逆も士君士の及ばざるところだ、ぢやア十二圓
七十八錢、これに違はないかね御夫婦、何、元金が七圓で三ヶ月の利足が五圓七十
八錢だと、いやはや此奴め、しかし今更ら一文半錢まけろとはいはぬ、が、冷血無

慙の極だ、非道酷薄の奴だ、あ、世間幾人か此奴のために慘澹たる悲境に沈淪する
ものもあるだらう」

おもはず拳に力を込めて突き放せば、顔色まっ青となつて物も得いはず苦しむぬ、
上田そのまゝ二階に走せ上つて、幸ひ川上より贈りくれたる今月分の十五圓、年末の
事なりとて別に十圓、あはして二十五圓を反故紙の如く引ッ掴んで駈け降りながら、
主人夫婦の前に投げ出しぬ、

「そのうち彼奴に渡すだけ渡しなさい、なアに残金は世俗の所謂る歳暮なるものさ、

は、は、は、は、

夫婦は老の目に涙一ぱい、幾度か無言に押し戴き、そのうちの十二圓に火鉢の抽斗より
七十八錢を添へて手渡せば、今更ら何をか不足の面魂、しづく懐中の財布より證文
を取出して金を請取りしまゝ、會釋もなく立出づる佞悍の相貌、上田しづかに見送り

て小首を傾けぬ、

「そもく彼奴等は何のために生きて居るか、ふしぎだね、全身これ汚醜の塊、さらに一點の香もなくツてさ」

左右より夫婦が老の頭を疊に摺り付けて、さまざまに嬉し泣きの言葉を、上田うるさ氣に手をもて打消しながら、

「そんな事は何うでも宜いさ、は、は、は、時に夫婦とも随分よく稼ぐね、わけて此ころは毎夜、一時になるだらうな」

「へエ貴方、これでも足らず勝で困りますよ、私等も此老年になつて斯うも苦勞するたア夢さら思ひませんでしたが、不幸つゞきでねエ貴方、其上たよりにする子といふものが御坐いませんから」

「なるほど、そんな面倒臭い事を聞くのが嫌ひだから、この二階を借りて二月になる

今まで問ひもせなかつたが、む、さうかい、全く子がないんだな」

「子がありさへすりやア貴方、また何とか工夫もつきますさ、勿論、姪が一人、両親に早く別れました姪を幼少の時から娘分に致しまして、元來さのみの馬鹿でもなし十人並すぐれた容色で、まづ老後は此女にと考へましたが、もし上田さん、油断のならないものは女の子ですよ、まだ男の放蕩者は焼き直しの法もありますかね、年頃の女で氣の勝つた小才の走つた俠と來ちやア却つて困りものです、その姪の娘にした女が貴方、ふとした事から喰詰書生の、しかも羽織襦袢落漢に打込みましてね、まるで狂氣の沙汰、お談話になつた始末ぢやア御坐いません」

「む、さうかい、そりやア大變な違ひで困つたらう、しかし人生いづれも其通りさ、また姪なるものが慚愧後悔して立歸る時もあるだらうよ」

「ところが貴方、もう幾年といふ長の星霜を連れ添うて、諸方へ流れ渡つた曉です

から、どうせ似たもの夫婦の怖しい女になつて居ませうよ、ですから今こゝへ無事に戻つて来てても、なか／＼おいそれと入れるこつちやア御坐いません、第一その男といふ奴が焼いても煮ても喰へない悪黨で、現在おのれの舅も同然に當る私を眞先に捉へて沸湯を呑ました上、ふかい處へ落とし込みましたもの」

「む、書生にも當時そんな凄惨な奴があるかね、全體ナンといふ男だ」

「行末の杖にしようと申つて仕込んだ一人の姪を取られましたばかりか、そのころ相應の下宿屋家業まで其奴のために潰されましたから、死んでも名は忘れず閻魔の廳へ訴へてやる覺悟、黒田健次といふ奴なんです」

「きくや否、上田力おもはず二十貫の大兵を身震ひして、さながら死毒を舐めたるが如き満面の苦痛、

「む、黒田、健次といふ奴か、け、怪しからん奴だ、む、不埒千萬な奴だ、ぶち殺し

ても宜い奴だな、汝ッ」

其六

封建制度の昔、交通不便の日本國中をたづねて親の敵を打ちし者のありしは道理なり、汐入村に五人相約して苦學難行せし中に、黒田一人その半途より飛び出でて爾來こゝに七年、おもひきや其黒田がために斯くなりしとぞいふ老の怨恨の涙に浮くばかりなる天井板一枚の上を、我ために悠々たる安眠の床として清淨潔白の腸を守らしむとは、人事の複雑にして單純なる集散離合の漠として密なること殆ど神の業に似たり、さるにても黒田め、彼奴が才氣と膽畧とをもて白日青天の下に大道を濶歩せば天晴れの男なるべきに、何ぞや自己みづから其才を曲け其膽を横たへて俗世闇夜の岐路に走るのみか、きけば生涯たゞ一人の妻とすべき女を取るにも先づ謀策を以てし、これが

紫の朱を奪うて後、その舅たり、伯父たるものを欺いて家業を失はしめ、飄浪また飄浪、さても其後いづこを流れ行きけんとは佛徳の慈悲眼にも我黨隨一の罪惡、おのれ巧みに法網を免れ社會の制裁を脱して燕の如く飛び抜け鯨の如く跳ね廻るとも、この上田力が眼に見付け次第、忽ち骨に刻して腐りし腸の流れ出づべきステツキの一打撃を加へて、あはれ願はくは悪木の實を結ばざるうちに毒汁の花弁を叩き落してくれんぞと、例に依つて例の一徹心、其夜は眼りもせず、夜具ひツかついで曉までも病める牛の如くに呻りぬ、

上田が心中、おのれが血を分けし兄弟の罪を犯せし家にあるが如く、ましてや前夜の恩に感じて以來ますます我を厚遇する主人夫婦が、をりく黒田のことを口にして黒白の證據に引出さるゝ我身の辛さ苦しさ、世間普通の血氣者に力を極めて胸に打たるるとも、黒牛の角を齧す蚊とも思はぬ上田ながら、この老爺に黒田といふ二字を言は

る、毎には満面の色を失うて其坐を起ちぬ、さりとして川上も今は昔の川上ならで一家組織の上に於ける川上が耳へ、かゝる事を聞かせて心を煩はさんも無益なるのみか、憎けれど黒田めは曾て刎頸の交りを結びし一人、たゞ我胸一個に深く藏して、あはれ一時も早く廻り會はんとぞ祈りぬ、

黒田健次に逢はんこと、汐入村以來の寄留届を傳うて、かつは餘所ながら警察の手に依つて求むること眼前に易けれど、上田が性としては忍ぶべからざるの業なり、ましてや彼奴が一別來の浮世を渡りし素行を想へば、

かつて汐入村の古巢を出でて四人おのく新なるの時、我その後始末に出かけて夜に入りしかば、幸ひの途上、淺草山谷の木賃宿に一泊の隣室を窺うて思はず黒田に出逢ひし折しも、彼奴が伴うたる一人の女、なるほど濫皮の剥けし二十一二の女が、我に向うて仔細らしき口上、しかも黒田がために萬事かくなり果てし辯解に力めし女、あ

れこそ當家の老爺が姪なるべし、南無三寶、あの時に其まゝ引ッ捕へて引き摺り歸り、川上倉橋と相談の上おもむろに施せば、猶いまだ彼奴を救ふの道はありしならんに、今更なれど惜しき事してけりと、あはれ斯好漢が玲瓏たる頭腦に近來一點の濁れる露を注いで、いはゆる先生得意の神韻縹渺を驚かしぬ、始めは何の縁もなく由緒もなく、たゞ二階貸いたし候といふ張札を見て借りし我、黒田がために斯く落ち果てたるを朝夕の眼に見んよりは、こゝを去つて新なる他に轉ぜんとは思へども、また黒田が連れ添ふ女の親同然と聞けば、いつ如何なる事より音信あつて彼奴が在所を知るの端ともならんか、かつは我友のために欺かれたる老夫婦を我また餘所ながら無言の間に扶けてこそ人間善導の一端ともなれ、さても天下の衆に與みする能はずして一人の悪友に心を煩はすの愚は愚なりといへども、我は天下の衆と俱に事をなすの力なく、たゞ情に於て一人の悪友を救ひ出すの力ありと、上田が

一念、一入さらに宿の夫婦を慰めて自己の罪障消滅の感をなしぬ、

其七

人間百年の生命を保つとして三萬六千五百日、これに四年目一度の閏を加へて三萬六千五百二十五日、古來稀なりといふ七十にして二萬五千五百五十日、これにまた十八度の閏を加へて三萬五千五百六十八日、もし人生五十の通語を算すれば一萬八千二百五十日に十二度半の閏となるのみ、そのうち世間普通の二十歳までは唯これ池中の物にして、いはゆる社會の人となるべき成年以上より五十までの三十年間は一萬九百五十日、これを日夜に分ちて半を睡るとすれば僅に五千四百七十五日、そのうち一日平均八時間の活動として朝夕の四時間を減ずれば四萬三千八百時間、これを日に數へて千八百二十五日間、また此中より三度の食事を要する時間は上層下層を通じて一日一時間

として千八百二十五時間の日數七十六日餘、長短その性癖ありと雖も大小便を合はして
 厠にあること日に三十分、これを合して殆ど三十八日間、されば以上の千八百二十
 五日間より百四日の必要を減じて千七百二十一日間、嗚呼これぞ人間まづ正當の身を
 保ちて兩眼あきらかに世を渡るべき時日ながら、何とせん人生の多くは徒勞懶怠にし
 て僅々たる此千七百二十一日間さへ朝寐に過し宵寐に耽るのみか、春の花、秋の月、
 夏の轉寐、冬の晝炬燵、その他の物見遊山に幾何の時を費し旅行疾病また免るべから
 ず、かつは無用の談話、不意の災厄、風雨の障碍、喧嘩口論、狂奔馳走、虚儀虚禮、
 さては世俗一切もろくの徒費空亡を算すれば人間の生命それ幾何ぞ、わづかに三年
 前後、千日あるかなしかの短日月と思へば、かの大厦高樓も美衣美食も功名富貴利害
 得失また河童の屁に似たる世の中を、まして老少不定の身體髮膚が何の違あつてか戀
 の奴となり罪惡の巷とぞなる、智慧も學問も謀策も入るものかは、以上は小學の生徒

なほかつ答へ得べき算數にして、人生わづかに此短日月を徳義の人となつて終ること
 實に易々たるべき筈を、俄の暴風に逢うたる蜘蛛の如く、わざく自己が心の絲を搔
 き亂して狼狽へ騒ぐのみか、たゞ人間五十と稱する一言の勘定違ひに道の遠きを驚き、
 迎も叶はじとて狂ひ出す奴、荒れ出す奴、さては凋れ返る奴の哀れさよ、は、は、は、
 一切世俗の才と智とは是れ人間を攻め落すべき惡魔の器械なりとは、上田力が今年の
 正月元旦に雑煮の餅を喰ひ過ぎながら、六疊の一室に伏し轉びて割り出したる統計
 論なりける、

胸前に支へし雑煮餅の過食やうくをさまりて、只この統計論を腹に持ちながら家を
 出づれば、何が目出たいやら勘定違ひの奴等いづれも今日を晴と着飾りて、例の惡魔
 が器械に責められつゝ奔るシルクハットの肥馬輕車より、浮世の暴風に吹き抜かれて
 心の絲の搔き亂れたる蜘蛛野郎に至るまで、屠蘇に酔うて往來は織るが如き虚禮虚飾

の眞只中を、相も變らぬ布子一點寒晒しの大兵を聳て、悠々また寛々と歩み出せし上田力、わけて今日は實際すぐれて目立ちぬ、

濱町の富田が邸宅も嘸や俗物虚禮の奴が充満して面白からざるべけれど、川上が許に倉橋吉田の來會すべきは必定、さらば汐入村の我黨た、一人の黒田を缺くのみ、いざや襲うて大に目出たからぬ持論を吐いてくれんと、氷りし大地に下駄の齒音からころと響かせながら、往いて見れば果して門前市をなすの諺に漏れず、出るもの入るもの新調を競うて洋服和服の混亂、さながら鯨の脊を見るが如く光れる中に、上田一人ぬツと蓬髮弊衣の大音聲

「たのまウ」

例の上田さんと小女が叫ぶ聲に、お清大明神はツと思つて、平生は兎も角も今日は格別、一年中の人々が改まりたる禮節群集の立關を我物顔に、あの變物どのを長く立た

せては當家の爲ならずと、忽ち馳せ出でて、

「おやく上田さん、よく入らッしやい、さア此方へ」

主人にも通ぜず其まゝ引き入れて川上が部屋に案内しつゝ、そツと勝手口より走せ廻つて上田が脱ぎ捨てし下駄とステッキを盗むが如く臺所へ隠しぬ、

上田先生かくと知らば大喝一聲、忽ち兩眼むき出して怒るべき筈ながら、知らねばこそ川上が部屋に打通りて人なきを怪しみつゝ、火鉢引き寄せて待つ間ほどなく、お清また取ツて返して、

「あの上田さん、甚だ失禮ですが暫時、親旦那様は早朝から諸方へお禮廻りの御不在中ですから、若御夫婦とも免れ難いお客様を、しかしお酒が出て居りませんから只今すぐで御坐いますよ」

「はゝゝゝさもさうづ、さもあらなッこツた、時に今日、倉橋と吉田は來なかつた

かね

「さやう、お二人とも先刻まで在らっしゃいましたが、貴方のお宿へ行くからって」
 「しまった、さうか、いつも僕ア出先を言うて置かないから、二人とも待つに待たれ
 ず去るに去られず聊か困ッてるだらうよ」

「なアに貴方、倉橋さんは此ごろの御身分、今日は綱曳の自用車でお急がしいから、
 なかく、迎も待つて在らっしゃる氣遣ひは御坐いませんが、あの吉田さんは御存じ
 の正直一片で書生さんの氣樂さですから、こりやア上り込んで待つてお在で
 すよ」

「さうく、倉橋も近來は器械で動く奴だからなア、しかし吉田は氣の毒だ、時にお
 清君、君も今日は改まって大變に化粧し込んだな、立派々々、二階から逆落しの滑
 稽を演じた時たア雲泥の相違、は、は、は、爾來なんともないかね」

「ほ、は、は、これでも貴方、可哀さうに人間の端ですもの、世間一般のお正月には
 洩れませんわ、おや、御挨拶を忘れたこと、上田さん、まづ新年あけてまして御目出
 たう御坐います、舊冬は段々と、相變りもせず、今年も宜しうお願い申し上げ
 ます」

「やア失敬々々」

例の統計論を荷ぎ出して今朝よりの耳目に觸れたる俗世の俗物を罵り、以て大に目出
 たからぬ氣焰萬丈を吐きしが、酒は目出たきと目出たからぬに關せずとて、左右より
 川上夫婦が隙間なき洒落と愛敬に強ひられ、お清も今日は平生の敵討この時なりと腕
 に糾かけて眞正面より攻め付けしかば、元來の底ぬけ上戸、シャンペン葡萄酒ビール
 日本酒なんでも御坐れと引ッ替へ引き受けて、飲むほどに飲むほどに流石の上田も今

は朦朧たる兩眼を押し据ゑながら聊か舌の根も亂れかゝりぬ、されど先生さらに心の一物を亂さず、頑たる本性、いよく勢ひを得て鐵の如し、

やア酔ツたぞ、全く酔ツたよ、さらば歸るべい、いや／＼呼べば應ふる川一重の彼方と此方、一泊するに及ばずと立關に立出でしが、おのれの下駄とステツキなきを怪しんで頻りに四邊を見廻す體、お清はツと驚いて勝手口より携へ出でながら、

「ほ、ほ、ほ、今日は大變なお客様で、もしや紛失いたしませうかと」

「は、は、は、虚言いへ、乃公の下駄が今日の立關にあツちやア頗る威嚴を缺くの恐れありとかの所以で、畜生、讒して以て何處の片隅へ流罪に處したのだな、や、かまはない、決して驚くに足らん、古今東西の歴史に於て小人しば／＼君子を貶するは珍らしからぬ事だ、は、は、は、は、」

「いえ貴方、どう致しまして、そんな失禮なことを」

「いや／＼お清君にして斯の如きは猶かつ可なり、まして其意にあらざるを辯ずるは以て其罪を恐るゝに等し、今日の當世あの得意の馬鹿者どもを見よ、あらん限りの罪惡亡狀を極めながら恬として恥ぢざるの醜體、や、言語道斷だ、は、は、は、は、」

ぶらりと門を出づれば、はや夕陽かたぶいて、晝の虚禮に馳せ勞れたりけん平生よりは俗物の往來いと稀にして、吹き送る川風の寒さも却ツて酔顏に心地よく、蹣跚たる脚下に踏み鳴らす下駄の齒音も冴え渡り、つきならずステツキの大地は氷ツて瓶を叩くに等しく、吐く息の虹に似たりとは仙人めけど、酒氣紛々と空を仰いで吹けば白く煙に似たり、やア愉快、快なる哉、快なる哉、

朗吟かすかに兩國橋を渡らんとする時、橋の袂より我を追うて來る人影、ちよこ／＼と小走りに過ぎ行かんとせしが過ツて我ステツキに躓くや否、どツと前に伏し轉びぬ、上田おもはず駈け寄ツて抱き起さんとすれば、

「いえ、貴方よう御坐いますよ、妾こそ却つて失禮を」

いひながら俄に起きも得やらぬ風情、よくく見れば此寒天に足袋もなき眞白の素足、しかも生爪を剥がして血を流しぬ、

「や、怪我をしたな、こりやア悪かつた」

薬はなし、せめて紙あるかと袂を探りつ、此女を見れば、傍らに抛け出したる一挺の古三味線、せきざろと聞き及ぶ古風の編笠、衣類も肌寒き薄着の見すほらしきに似もやらで、暮れかゝる空に一際すぐれて白き横顔、憂きに亂る、鬢の毛、さては人の門に立って三筋の糸に露命を繋ぐ哀れの女ごと、をりしも袂にありし五十錢の銀貨一個、そつと取つて差出しながら

「膏藥代だ」

女やうく紙屑に爪先を巻いて、落ちたる三味線と編笠とを拾ひあけしが、銀貨は其

まゝ押し返さんとするを、上田また押し戻さんとして、互に顔を見るや否、女まづ何とやら驚いたる體に走せ出せしを、上田おもはず三步四歩おツかけて袖を捉へながら、

「これさ持つて行かんか、行けつてば」

「いゝえ貴方、どう致しまして」

「そりやア不可ン、是非」

「どうか、お放しなすつて、少々急ぎますから」

「ぢやア猶更ら早く持つて行け、行けよ、寸志だ」

いへども夕暮を幸ひに顔を反けて隠す風情、捉へられし袖ふり切つて遁け出さんとする體、袖乞同然の女には不思議の女と思ふうち、上田ふつと忽ち心づいて猶更ら固く掴みながら、外れても相手が相手、もしやと思ひ切つたる聲を潜めつゝ、

「黒田、黒田の妻ぢやアないか」

いはれて更に一入うち驚いたるまゝ遁け出さんと焦れども、芝居めいて主は其まゝ片袖あとに残らねば、女も今は叶はぬ瀬戸とや思ひけん、やうく振り返りて小腰に差俯き泣聲を潜めつゝ、両手を合はせながら、

「どなた様かは存じませんが、もし、萬一ひよつと黒田を御承知の方なら、どうぞ此まゝ妾を見遁して下さいまし、これで御坐います、この通り、後生ですから」

上田おもはず兩眼の涙はらくくと落せしが、捉へし袖の手は放さず靜に差寄つて、

「いつか山谷の木賃宿で逢つたもんだ、決して驚くにも足らん恥づるにも及ばない、今どこに居る黒田は、身のため悪うせんから」

「はい、ありがたう御坐います、萬事は妾の此さまを御覽あそばして」

「そんな事は何うでも宜いさ、黒田は全體どこに居るのだ」

「いゝえ貴方、それを申し上げるくらゐなら斯様に、かやうに手を合はして」

「やア困ツたな、しかし黒田の居所を知るまでは、このまゝ見遁す事の出来ない理由があるんだから、それとも、僕の宿へ来るか」

「そりやア貴方御無理で御坐います、人を、人を泣かせるといふもの、御覽の通り、人様に泣かされずとも、夜晝さんく泣き通して居ります身分で」

「さう、さう慘澹に言はれると僕ア實に困るよ、が、是非、ぢやアかうしてくれ、どツか此邊のね、あまり人の目につかない、料理屋でも何でも宜いから」

「ですが貴方、妾の此さままで」

「そりやアかまはし、其方にさへ迷惑なきやア僕は更に無頓着だ」

お清の如きは例外、およそ女に對うては無口同然の上田、それも心の底に物あつて仔細ぶるにもあらず恥ぢらうて堪へざるにもあらず、たゞ一切すべて阿魔は糞面倒なりといふ筆法よりの無口ながら、今は黒田に逢はんとする一念、思ひがけなき幸ひのお

島を捉へて放さばこそ、伴うて棲家へ押し行かんか、従うて我宿に來らんか、それもならずば此邊の小料理屋とまで打込みしは、斯人にして天晴の出来なり、男も男、黒田ほどの男に連れ添うて浮世の浪風さま／＼に渡りぬいたる女、しかも生れて何處やらに一風あるお島、今は所詮このまゝ、遁れぬ瀬戸際と性根を据ゑけん、さらば妾が御案内いたしませうと、兩國橋を立戻りて廣小路を左に折れつゝ、賣賣屋に等しき小料理屋の奥の一室、吊ランプの下、互に坐して差對ひし時は、上田も涙、お島も涙

「かねて御名前は承つて居ります、いつぞや山谷の木賃宿でも、夫婦が面目もない境涯を御覽に入れましたのみか、其節は一方ならぬ御芳志、それに今また斯様な淺ましい姿を」

「や、その事は言ふに及ばん、しかし黒田め、いよく怪しからん奴だ、諺にいふ身から出た錆、自己みづから一身の落魄で濟むべきところを、前後の思慮もなく人の娘、いや妻を持つも宜いが、持った以上は相應にすべき筈を、氣の毒千萬、そんな姿にまで落し居つて、全體どこに何をして居るです彼奴は」

「さう貴方のやうに仰しやいますと、あの人はかりが悪くつて、妾が大變に何だか、迷惑でもして居るやうで御坐いますが、こゝは何卒、そんな事を言はずに、え、腐れ縁だ、しようがない、互に得心づくの悪縁で苦勞する奴等だと、かう思召して、ねエ貴方」

「そゝそれが、其處が、さう聞くほど僕ア一種の感に打たれて、殆ど彼奴を悪魔の如く思ふのだ、しかし、よく、あんな奴を見捨てずに苦勞して下さるよ、僕ア實に感謝する、萬事は措置いて感謝します、黒田は僕の兄弟でもないが」

いひつゝ、大の男が兩眼の溜め涙ほろ／＼と落せば、流石のお島も思はず齒を嚙んで差

俯うつむきながら、

「あの人に、あの人に定めし、いろんな御不足も御立腹も御坐いませうが、どうぞ、この妾わかしが、かやうな姿さまに落ち果おてましたに免めんじて、ねエ貴方あなた」

「僕ぼくア、いろく言いはうと思おもつたがね、もう何なんにも言いはん、畜生ちくじやう、天下てんかたゞ一人ひとりの妻つまを泣なかし天下てんかたゞ一人ひとりの友ともを泣なかす奴やつ、僕ぼくの心中しんちゆう、殆ほとんど無量むりやうの感慨かんがいに堪たへんです」

「良人りやうとに連つれまする女房にようぼうの役目やくめ、まして妾わかしのやうな女おんなは、譬たとへ何なんうなツても宜よう御坐ございます、貴方あなたのやうな、お友達ともだちを、お泣なかせ申まうすなんて、誠まことに濟すまない人ひとで」

「いや細君さいくん、さう言いはずとも宜いい、たゞ一度ど、黒田くろだに逢あはして下ください」

「それが先刻せんこくも、手てを合あはして、おたのみ申まうしました事こと、なるほどお逢あひ下くださいまし、て御諫言ごいげんの一言ひとこともいたゞけば、眞實しんじつあの人の爲ためにもなりませうが、どうか茲こゝを、もう二三年ねん、せめて人ひとらしい身分みぶんの端はしになりますまで、この妾わかしが是非ぜひお願ねがひ申まうします

から」

「ぢやア餘所よそながら、彼奴きやつの面つらだけでも見みせて下ください」

「ほ、ほ、顔かまばかり御覽ごらんなすつたツて貴方あなた」

「いや僕ぼくの心こゝろは、それだけでは濟すむべき理由わけがあるんだから、千言萬語せんげんばんごなほ飽あき足たらぬ彼奴きやつに、もはや一言ひとことも交まじへない、斷だんじて言いはないから是非ぜひ、面つらだけ、全體ぜんたい、僕ぼくの

胸むねを打明うちあけりやア、黒田くろだは勿論もちろん、和女おまへさんにも言いひたい事ことがあるんだ、しかし、こ
れは別問題べつもんだいさ」

「妾わかしに、あの人の事ことは只今ただいまも申まうし上あげました通り、どうぞ茲こゝ二三年ねん、しかし妾わかしに仰おつしやることが御坐ございますなら貴方あなた、決けつして御遠慮ごゑんりよなく、今いまこゝで」

「黒田くろだに一言ひとこともいはぬ上うへは、それも無益むえきだらう、いはない方が却かへつて身みの爲ためです」

「おや、妙めうなことを、どうせ、こゝまで落おちましたもの、この上うへの爲ためにならない事ことは

御坐いますまいから、おかまひなく、どうか」
「ぢやア一言だけ洩らすがね、實ア和女さんの伯父の家の、その二階を僕が借りて居るのさ」
「え、ッ」

人事の奇なる、浮世の怪なる、粗密集散いよく妙、人なき冬の夕暮に、ところは兩國の橋の上といふさへ何とやら小説めいたるに、おもはず我ステツキに躓いて倒れし女を、おもひきや黒田が妻の落ち果てし身ならんとは、さては攔みし片袖あのみ、振り切つて遁け出さば、しばし其影を見送つて我手に残りし形見の一品、これを持ち歸つて宿の主人に示しての物語より、やがて我その片袖を證據に夫婦が世を忍ぶ隠れ家を探ねあてつゝ、何として何とやらせば殆どこれ一篇の駄小説、只その片袖が切れも

せず、おのれ見付け次第と張り詰めし平生の憤怒も現在その妻が涙の可憐に打消されて、一先こゝに黒田を見遁せしといふだけが小説の外、思へば人間萬事あり得べからざる小説の類が事實に多くして、人間萬事あるべき筈なる普通の事實が却つて浮世に少し、あゝ天地は一大劇場、人事は宛然たる一小説、さては今朝の我頭腦より割り出せし天晴の統計論も、いはゞ生物を捕へて死物を數ふるが如く、二天作に打ち込んだる書生論、どうやら危し危しと上田先生こゝに眉を顰めて無常の一端を悟りぬ、

其八

黒田健次といふ男、いさゝか心に身の末を思つて胸に浮世の常を辨へなば、天晴れ當世に家をなし名を得べき筈ながら、唯どこやら、人並外れて恍惚いたる滑稽が立身の妨げとなり、また時に狂氣めいたる闇雲の飛び乗り藝が出世の害となり、所詮と

かぬ天下丸香の横着に折角ふみ止りし立脚の地を幾度か失ひ、さては呵しう變に男ぶツて妙に腸を洗ふが如き本性、それも眞面目の人間にあることか、生憎此奴の性に宿るがため却ツて事に躓き易く物に敗れ易し、されど元來の悪人にもあらず無學文盲にもあらず、また利害得失に迷ふ鈍物にもあらず、窮達消長に聞き愚物にもあらず、しかも機を見て變に應ずる才氣は人一倍の頭上に飛び越え、事に臨んで生命ものかは世上の萬事を何の糸瓜と心得たる大膽不敵さは、たとひ四面楚歌の聲裡に身を埋むるとも鼻唄うたうて撓まぬ男、よしや金が敵の世に落ちて借金の中より目鼻を差出すとも竟には大手を振ツて伸し上げるほどの奴ながら、あはれ何とせん、人間は元來これ肉身の五體、病といふ敵に犯されては流石の男も枕頭に這ひ寄る油蟲一疋を殺すの勇なし、されどなほ僥倖、こゝに過分の女房お島といふものあればこそ、お島また女の中の變物、乗れば乗るべき玉の輿を十九の春より振り捨て、二十六の今日まで、この難物と

のに苦勞さんぐ草を敷き寢の夢うつ、幾度か泣きの涙に身を浮かせつゝ、思ひ切ツて死目の際の壁一重まで落ち果てながら、儲どこが宜いやら他人には知れぬ貞女立、しかも今日このごろは皮も破れし古三味線といふ淨瑠璃文句そのまゝ、人の軒に立ツて一文二文の手のうち貰ふまでに成り果てながら、

本所の場末、むかしは藁蓆一枚を錦繡の夜具に代へたる辻君の巢なりとぞ聞き及ぶ、その吉岡町の裏長屋に、今はこれ宿昔青雲の梯より眞逆様に落ち果てたる黒田健次、疾病の床に臥して破れ蒲團の柏餅に餡が食み出る五體を縮めながら、一時はマニラの葉巻を吹いたる身がカンテラの油煙に咽んでの男泣き、あゝ貧は諸道の妨といへども病は一身の劔なりけりと、瘦せ枯れたる手首に枕頭の鼻紙を探ツて、飛び出でたる頬骨に窪みたる眼の光り物凄く、破れ窓より吹き入る風を厭うて、思はず總身を震は

しぬ、

折しも氷れる路地口に、乾き切つたる草履の蹠音は正しくお島、わけて今夜は何とし
て斯く遅かりしと思ふうち、はや門の戸口に立寄つて靜に引き開けながら、

「只今、歸りましたよ」

いふさへ常に變りし震ひ聲、さもあるべし、世間は正月の元旦、我等は現世の地獄、
泣きの涙に唄ふ小唄を屠蘇の機嫌の面白さに聞かれて、しかも肌薄き寒天の編笠一重
に恥辱を忍びつゝ、一文二文の手のうち乞うて病める良人の我を養はんがため、かは
いや、今ごろまでも素足のまゝの破れ草履、これが女房なればこそ、あゝ勿體なし、
勿體なしと、うまれ故郷の氏神に青痰ひツかけて國を飛び出せしほどの男なれど、お
もはず片手をあけて障子の影を拜みぬ、
お島やうく、裾の塵うち拂うて水雑巾の濡れたるまゝに足を拭ひつゝ、障子ひきあけ

て臥せる良人の顔色まづ窺ひ見ながら、今の露命を繋ぐ古三味線と編笠を片隅に差置
き、缺けたる火鉢の土瓶を降しつ灰かきわけて埋火の炭團を掘り起し、そのまゝ顔に
両手をあて、差俯きし體、嘸や寒かりし夜の霜にうたれて齒の根も合はぬためかと思
ひの外、しゆつと火に落せるは一滴の涙、おもはず顔ふりあけて、

「わけて今日は酷寒かつたことよ」

健次は見るに忍びずとや、臥せるまゝの枕くるりと振り代へて壁に對ひながら、

「だらうよ、ねエ、かうして家内に寝て居てさへ身に徹へて堪らなかつたもの、第一

今日は正月の元日、それに和女が其さままで」

「なアに貴方、そんな事は何ともないさ、どうせ斯うなりやア昔からの文句通り、藝
が身を助けるほどの不幸さ、かまふもんですか、人は七顛び八起きとやらで、冬が
仕舞へば春が來ますさ、今だつて貴方、よその軒に立つて、お錢は貰つても、お飯

に免じて、お錢は戴きませんよ、ほ、ほ、ほ、ほ」

「は、は、は、は、その三味線を弾き出されて堪るものか、そりやア乃公がために和女の悲鳴も同然だア、勿體ない、時にお島、今日は乃公も何の氣なしに出したがね、あとで考へると、どうも忍びないよ、明日と明後日の二日だけは止しにするが宜い、せめて正月の三日だけでも、うぬが女房を其風俗で出したくない、三度の粥は二度ですすつても構はないから、嗚呼、せきぞろ編笠だの鳥追の小唄など、よく昔の繪にあつて何となく太平の象を現してるやうだが、さて現在まのあたり自分の境涯となつちやア慘澹の極、大に不_ふ太_{たい}平_{へい}の現象だ」

「だつて貴方、家に居ても人並の正月が来るぢやアなし、それにまた、この家業は松のうちが稼ぎ時ですよ、御覽なさい、今日の一日は常の七日分より多いですよ、そら、一圓近くあります」

いひつゝ、帯の間より色褪めし毛糸の巾着を取出して、ざらりと枕頭に音さすれば、健次おもはず臥せるまゝの頭を震はせながら、

「一圓、わづか一圓内外が、七日分の稼ぎより多いたア、お島、勘忍しろ、よ、今に乃公が、よくなつて」

「それく、さうですとも、そこですよ、一時も早く、よくなつてねエ、今の苦勞を寢物語りですよ、うたの文句にある通り、過ぎし昔を夢にしてねエ」

「む、」

せめて此三日だけはと引き止めしかど、今年は今、來年こそ二度ぶりの正月めでたう重ねて迎へんと、またもや編笠に面を包み古三味線を抱へて立出でんとする妻が後影、健次おもはず臥したるまゝの枕を敲て、見送りながら、

「ちやア行ッて來な、しかし早く歸るが宜いぜ、前夜のやうに遅くなッちやア身の毒だ、冷えるからね」

「あい、なるべく早く歸りますよ、そして今夜ア何かあツたかいものを、買ッて來ませうよ、もし貴方に出來ない用でもありやア、隣屋の婆さんをお呼びなさい、萬事たのんで置きますから、しかし、あんまり横柄にいふと不可ませんよ、どんな奴にも、かうなりやア仕方がない、お世辭の一つも振りまいてね」

「おいよ」

「行ッて來ますよ」

「氣をつけなよ、一月ア酔ッばらひが多いからね」

「大丈夫、そんな事は、たしかです、ちやア行ッて來ますよ」

お島が立出でし後には、さすがの健次も夜具ひツかついで、をりくほッと溜息を漏

らしぬ、

此日の晝頃、路地口より一人の車夫が入り來りて、黒田さんと仰しやるなア當家ですかといふに、健次は臥したるまゝの首を擡けて、

「さうさ、この長屋中で黒田は此處一軒だが、何の用で」

「へい、これを持ッて來たんで、こりやア當家へ届ける品ださうで、委細は中の手紙にといふこッてす、風呂敷のまんま置いて行きますから」

「おいく誰からだ、おい全體、どツからだ」

しきりに呼び戻せども、かねて言ひ含められてや、車夫は其まゝ見返りもせず走せ去りぬ、

追はむにも病める身の叶はず、叫ばんにも此ごろの聲溜れて及ばねば、置き去りし白金巾の風呂敷包み、臥したるまゝの手を差し伸べて引き寄せつゝ、その結び目に反故

の觀世捨もて固く封ぜるを、いよく怪しみながら解いて見れば、八寸ばかりなる杉の折箱、鶏卵三四十を埋めたる粉殻の上に一封の書状めいたるもの、しかも宛名の文字はなけれど、この裏長屋に入り來りて黒田、たしかに黒田々と二度も念を押せし車夫の言葉、よもや門違ひ人違ひにあるまじと、その一封を開けば十圓紙幣七枚、健次あつと驚きぬ、

身は疾病に伏して賣藥の手療治も届きかねたる境涯、まして一人の妻に古三味線かへて門に立たすほどの今この我に、名もいはず仔細もいはで届け放しの七十圓とは、そもく何者ぞ、思ふにこの鶏卵は車夫に悪意なからしめんとの一品、この金子こそ送りしもの、本意なるべし、さるにても何者ぞ、奇怪、奇怪、ふしぎくと猶その七十圓を手に取り上げて數ふれば、別に紙幣と同じ紙幅を挿んで何をか書ける文字あり、健次じつと瞳を凝らせば、

天は汝を惡む、されど汝の病を憐れむ、

や、筆は正しく一目に其人と知るべき上田力、さても上田なりけり、力なりけり、されど何として今この隠れ家を知りけん、家を知るのみか何として我病を知りけん、また彼奴に何として七十圓の金、そもく川上倉橋の類ならば別れて茲に數年の今日、世に出でて七十圓の金子さらに怪しまねど、彼の狷介、彼の潔癖、彼の朴訥、彼の頑たる一徹、彼が如き獨尊孤立の性として今なほ一個の仙骨なるべく、よしや世に出づればとて清貧洗ふが如き筈の上田が、一時に七十圓、しかも揃ひし手より出でたる十圓紙幣七枚を得らるべき境涯とは猶更ら以ての奇怪、されど上田なればこそ、嗚呼かの力なればこそ、かつて山谷の木賃宿に我落魄を見て前後の差別もなく汐入村の後始末に託されたりしといふ十餘圓を抛つて去り、今またこゝに七十圓、あはれこの七十圓は正に彼が天性として熱湯を飲むよりも苦しく幾何の潔白を損じ幾何の疑懼を抱き

幾何の慘澹たる苦心中より湧き出でたる賜物なるべしと、黒田健次おもはず病床に
起き直ッて端坐しながら、あゝ君は我を惡む。されが我の病を憐れむこと斯の如きか
と、窪める兩眼の涙はらくくと落しぬ、

いにしへの君子なるもの我これを知らず、たゞ我友に斯の君子あり、かつては愚と稱
し野暮と嘲り不通と罵り仙人殿と笑ひ、果は太古の遺物よろしく考古學者の一粟に供
すべしと冷罵嘲笑のあまり殆ど度外に置きしを思へば、正に大罪を犯せるが如き我、
こゝに慚死すべき筈の我を、彼なほ捨てずして我を思ふことの切なる、あはれ何をも
て酬いん、さても我この病に伏して此まゝの窮巷破屋に死するとも、妻としてのお島
あり、友としての上田あり、さらに人間の不幸なるものにあらずと、十年一日さらに
屈せざりし黒田ほどの横着物こゝに感歎の腸を絞ッて泣きぬ、
はや冬の日の暮れ易く、寒天に啼き渡る鴉の聲も身に染みて、心せくまゝに刻み歩に

歸り來りしお島、やう／＼家内に入りて破障子ひき開けながら、

「只今、けふは平生より早いでせう、ほんの僅少ですが、あの牛肉を買ッて來ました
から、すぐ煮てあげませうか」

いひつゝふツと枕頭の折箱に目をつけて、

「おや、それはどうなすツたの、どこから」

「これか、こりやア鶏卵の折で今日、さる人から貰ッたのさ」

「さる人ツて、どこから」

「それが妙さ、晝ごろね、一人の車夫が、たのまれ物だからツて置き去りにして往ッ
たのよ、いゝや決して、お門違ひでもない、たしかに黒田々々と二三度も念を押
してよ、しかしお島、まんざら心あたりのないでもない、まだ此折箱の外に、そら金
が七十圓この通り」

「おやッ」

「今の此ざまだもの、一圓の金だッて誰が呉れるもんか、まして七十圓を名前も言はず鶏卵の折に入れて届けッばなしの贈り主は」

「ちよいと、お待ちなさいよ、萬一、ひよツと、いや、それにしては、はてね」

「おや和女の方にも何だか、心あたりのあるやうだな」

「ないでもありませんがね、少々お金の高が合ひませんから」

「ふしぎな事をいふ、金の高が合はないア」

「いゝえ貴方、勘定の高ではないの、たゞね、妾の思ッてる人にしては、よもや、これだけの金はと、思ふのですよ」

「むゝ、しかし、そりやア誰だ、何といふ人だ」

「妾より貴方の心あたりは」

「和女から言ッて見な」

「なに貴方から」

「いや和女から聞かう」

「ぢやア言ひますがね、もしや、あの上田といふ人」

「えッ、どゞどうして、それを」

「えゝもう何も彼も打明けて仕舞ひますがね、實は、その上田といふ方に、前夜、逢ひましたの」

「逢ッたア、いや眞實に逢うたのか」

「なに貴方、虚偽をいひますものか、しかも兩國橋の上で、この、この袖を掴まれた時、妾やア手を合はして、をゝ拜みましたよ、泣くにも泣かれず、遁けるにも遁けられず、まるで芝居さ」

「わ、それで分つた、その時この住居から病氣の事を」

「なアに貴方、どうして家なぞを知らずもんですか、妾は兎も角も、連れ添ふ男の恥辱になるこつてすもの、是非とも黒田に逢ふつて、頻りに問ひ詰められました、そこは一生懸命、どうやら斯うやら言ひ抜けて、しかし、妾の後影から見えがくれに前夜、ついて来たかも知れませんよ、全くは」

「む」

「そればかりぢやアない、貴方びつくらする事が、まだありますよ」

「なんだ」

「なんだつて、こりやア流石の妾も振り返りましたよ、あの上田さんがね、二階を借りてる家の亭主が貴方、例の妾の伯父さんなの」

「え、ッ」

「しかし上田さんは男ですよ、妾が段々と理由を話しましたら、あの怖い目に涙をいっぱい溜めながら、今夜の事は上田が胸一個に藏めて、決して誰にも言はないから、何分よく黒田を介抱してやってくれろつて貴方、實に、あの人は外貌によらない心の優しいばかりか、男ですよ」

「あいつア男だ、男だ、しかも骨から響るたア彼奴の事さ、この七十圓も、どれほど骨を折つて生み出したやら、そして上田の下宿、いや、あの伯父の家を聞いたか」

「それがさ、どうしても言つて下さらないの、乃公が黒田に逢はないうちは乃公のところを言ふにも及ばないつて、その實、妾等夫婦に心配させまいと思つて下さアね、あれこそ、全くの男、しみぐ、感心しましたよ」

「いや、兎も角も珍らしい男だ、しかし世の中は不思議だね、あの伯父の家に上田が居つて、その上田に和女が擱まつたとは、それが却つて乃公の幸福で、明日から醬

薬にかゝれるたア、實に不思議だ、人間萬事」

「ですから、油断がなりませんよ、悪い事は出来ないもの、何だか浮世が怖くなつて來ましたワ、あんまり廻り合せが手厳しいから」

「はゝゝゝさういやアまづ、そんなものだが、しかし不思議だ、妙だ」

其九

川上夫婦が人知れぬ一夜の寢物語りに、

「ねエ芳、上田のこつたから別段どう斯うツて怪しい事のある筈もないがね、そら去年の冬、和女から言ひ出して、あんな裏屋の二階で自炊さすよりやア此方へ引き取ツて、少しでも氣樂にさしてやらうと思ツた時、彼奴が例の頑として應じなかつたは宜いが、その月から少々變だよ」

「變たとは、何か變な事でも御坐いますの」

「外でもないがね、和女も知ツてる通り、月々十五圓づつ仕送ツてやるが、いつも五圓乃至三四圓は餘分だと言ツて、いくら押し戻しても抛り込んで歸る奴がさ、先月に限ツて其まゝよ」

「そりやア貴方、いくら上田さんだツて、一年中の暮ですもの」

「それは承知さ、だから別に乃公の小遣から十圓といふものを餘計に遣ツて置いたに、また半月たつか経たない前夜、めづらしいこつたね、金を借せといふのよ、それも上田の事だから、かういふ新版の書物とか下駄とか何とか、いつも子の親に於けるが如く正直に必要な物品を證明する男が、前夜に限ツて突然、しかも七十圓といふ金を借せといふんだ、無論、この上田力に七十圓の金子は定めて怪訝に堪へんだらうが、その疑ひ怪しまるゝを甘んじて借用したい、もし君にして上田を棄つれば已

む、幸ひ未だ捨てずんば是非とも借りたいて、何だか常でない語氣で、また頗る決心して來たらしかつたよ」

「おや、さうですか、なるほど變ですな、しかし貴方、どうなさいました」

「どうするもんか、彼のこつたから、そのまゝ出して遣つたよ、出しては遣つたがね、あとで考へると、どうも此まゝ捨て置かれない、何故ならば、上田に與ふる七十金さらに惜しまぬが、上田にして俄に七十金の必要に迫つた理由が容易ならんこつた彼が身を取つて」

「さうですなエ」

「さうですなエぢやアない、和女、なんか上田に就いて、別に變つた様子でもあると思はないか」

「いゝえ別段、やはり平生の通り、あんな方だと思つて居ますよ」

「む、いよく奇怪だ、まさか上田がねエ、色の戀のと」

「ほ、ほ、ほ、上田さんが貴方、馬鹿らしい、そんな事が」

「だから猶更ら不思議さ、しかし乃公も一旦、男らしう何にも問はず、唯、よしと一言の下に出した金の使ひ道を、今更ら呵しう改つて詮議立も出来ないから、こりやアイツそ和女からでも」

「いえ、妾では却つて、それよりか、あの清は如何でせう、彼女ならば萬事あの通りの無遠慮で其上に愛敬もあり、また二階から落ちて以來、俄に上田さんと感情が善くなつて居ますから」

「む、さうだ、よく氣がついた、なるほど、清が宜い、あれに萬事そつと言ひ含めて何となく餘所ながら探らして見るんだな、防ぎ手が上田で攻め手が清と來ちやア面白い、面白いのみならず、逆も上田は叶ふまい、きつと攻め落されるね、一方が殆

「馬鹿ア言へ、風をひくなンぞア片々たる俗界の俗物が身體よ、乃公なンかア正にこれ鐵腸鐵身、故に生涯一度、死病にあらずンば病まないんだ、しかし用がありやア謹ンで承るよ」

「甚だ失禮ですが、貴方の御部屋まで」

「こゝで此まゝ濟まない用かな」

「少々お長くなりますから」

「あまり長くなられちや困るよ、はゝゝゝゝゝまた慌てゝ二階から落ちまいぜ」

「ほゝゝゝゝ」

さらば来いと其まゝお清を伴うての逆戻り、どしくと音する後より又みしくと二階の梯子段を上りつゝ、

「おや、まツくらですね上田さん」

「まてゝ今に火を點けるから、じつと靜に泰然と其まゝ其處に落ち付いてろ、全體お清君、和女の身體はね、だぶくと變に肥り過ぎて妙に様子ふるから中心を失ふンだよ、はゝゝゝゝゝ闇中に物を探るが如しか、いや如しぢやアない全くだ、豆ランブの置き處は机の上の、おツと此處だが儲マツチは、はてな」

「下から火を借りて來ませうか」

「いやゝゝそれに及ばン、無い物は無いが、あるべき筈の物は屹度あるんだ、借りちやア不可ンよ」

「だって貴方、あんまり手間が取れますもの、お金を借りるではなし、マツチぐらる借りたツて」

「何だと、金を」

「いゝえさ、お金とマツチは一緒になりませんがね、まア物の道理が」

「いや借りない、決して借りない、きつと探し出すんだ、もし遅くなつて悪けりやアそのまゝ直に歸るが宜い」

「ほゝゝゝゝゝゝなに貴方、悪いとも何とも申しは致しませんに」

いひつゝお清が面つきだしてペロリと舌を出せど眞黒闇、ぢやア黙ツてろ、マツチの見付かるまで、畜生をかきな事をいふ女だと振り返ツて睨めども眞黒闇、やうく探し出して豆ランプに火をつけながら、例の達磨然たる上田先生おもむろに振り返れば、お清も今日は心のうちに神算鬼謀をめぐらして膝を進めつゝ、携へたる菓子折とブラのの大瓶、

「あのウ上田さん、貴方は宮本武蔵流だからツて、此お菓子は若奥様から、またこの御酒は若旦那様からの御進物です」

「はゝゝゝゝゝゝ夫婦で雨風の進物たア妙だ、しかし人は其氣のあるところ自然と物に

現るゝもんだね、まづ細君がよ、その容貌の彩ツて美なること菓子くわしの如く、其ほツとして未だ深く浮世の風に當らざる箱入娘の餘波が甘味で、人に接して愛敬のこほるゝところが風味で、交際場裡の華ともいふべきだがね、もし食ひ過ぎると胃を害して人を害ひ、もし久しきに渡れば腐敗するの恐れあるは、正に懷中生育の婦人が氣隨の性として無遠慮の上田などを竟に疎外するに至るが如く、をりくゝの寢物語りに良人を咬してね、はゝゝゝゝゝ怒ツちやア不可ン、全くの事だ、女といふものゝ神聖は處女のうちに、人の妻となつては既に業に小人と一般、逆も養ひ難きものさ、また川上のブランに於ける如き、そのピンとして嚴しい中に一種の情を含んで甘味のあるところが彼の本性で、しかも量を知ツて飲めば無上の興奮劑となり、情を知ツて交れば無類の益友となる、が、この限りある瓶に入つて巧妙美麗なるレツテルを貼り付けたところが正に當世紳士たる富田家の婿になつた所以で、惜しむ

らくは我輩、これを製造したまゝの大なる樽より汲み上げて呑み得ざる遺憾さだ、はゝゝゝ時に用は何だね」

「おやくちゝンぶいくで何のこつたか分りませんが、大變に長い前口上です、用ツて、別段これといふ用でも御坐いませんの、たゞね、貴方が、お淋しからうツて、この二品を」

「ふむン乃公の御機嫌を伺ひに來たのだな、使者がら猶更ら以て痛み入るよ、いやもう見る通り御機嫌の體で、わざわざ寒風に吹き抜かれて腹減しに罷り出ようかといふ勢ひだよ」

「虚言を仰しやい、いくら貴方だツて、一月早々、わけて昨日今日この酷い寒さを好んで、わざわざ吹かれに行く好奇心がありますものか、虚言々々、あら虚言だワ」

「こら待て、いやしくも上田力たるもの、生來いまだ會て一言の虚偽を言ツた覚えは

ないぞ」

「ほゝゝゝよくまア貴方、しらぐしい、そんな眞面目な顔をして、なるほど上田さんのこつてすから、たいていの人は眞に受けませうが、どツこい、そこは憚りながら妾ですよ、白むくでツか、ぢやアない、失禮ながら黒むくでツか」

「や、此女また喧嘩しに來居ツたな」

「いゝえ決して、なかゝ貴方、そんな大膽な、失禮な事が」

「ぢやア何故、からかふんだ」

「からかひは致しません、虚言だから虚言だと」

「だ、誰が虚言を」

「貴方が」

「畜生」

「いけません、いくら何と誤魔化しても貴方、だめですよ、はア、駄目です」

「何が駄目だ」

「何がッて知ッて居ますよ、ちやあん御存じなの、この三平二満が」

「は、は、は、は、貴様、みづから二平三満たるを知ッてるのか、いや感心、おのれを知るものと謂ひつべしだ、は、は、は、は、は」

「上田さん、卑怯です、貴方にも似合はない岐路へ這入ッちやア不可ません、さア白状なさい、いつたい全體どこへ往らッしやるの、この寒いに」

「卑怯、白状せい、こら卑怯たア何だ、白状とは何を」

「とほけてさ、憎らしい、貴方ア外見によらない術のある方だよ、どこの間拔が此寒空に、ほ、ほ、ほ、世間は寒くッても、どツか人の知らない、あツたかな穴があるンでせう」

「穴、いよく以て穩かならん言を發する女だ、うまれて青天白日の下に大道闊歩の

この上田を、穴へ這入るたアどうだ、穴とは」

「穴とはね、御自分が獨りで、そツと覗ッてコソノと這入り込む穴のこツてすよ、

そら、其穴には、美人が化粧をして待ッて居ませう、あら上田さん入らッしやい、

ちよいと御様子ごやうすの宜いことよ、平生お見受け申しても、とか何とか言ッて、ねエ貴

方、おや、おや、上田さん、おツかないこと、そんなに目を剥いてさ、お憤りな

さらなくても宜いぢやアありませんか、おや、おや、おや、妾をお撲ちなさいませの」

「馬鹿、貴様のやうな女を、ぶち殺したッて、なんになるものか、馬鹿め、早く歸

れ、

「歸りません、その穴を仰しやるまでは」

「や、この家鴨め」

「家鴨」

「家鴨ぢやアないか、いやに横肥りしやアがツて、胸を突き出して、不美術な大尻びよこく振ツて、ぎやアくと喧しい、家鴨め」

「同じこツて、あひ鴨と言ツて下さい、よウ上田さん」

「いッて下さいよウか、また畜生、よウと出やアがツた」

「がツても、がらないでも、それは別問題」

「別問題、こりやア呵しい、滑稽の極だ、別問題たア恐れ入ツた、殆ど天下の奇だ、全體いつ誰に教はツたのだ、別問題なツて」

「さう貴方、輕蔑なさるもんぢやア御坐いませんよ」

「輕蔑、や輕蔑か」

「輕蔑ですよ、しかし上田さん、妾の言葉尻ばかり捕へて貴方、御自分の返答は何と

なさるんです」

「何の返答だ」

「穴のこツてす、さアどこの穴です、この蟹野郎、なぞと失禮な事は決して申しませんから」

「あ、小人おのれが心を以て刃りに君士人を忖度するか、は、は、は、お清君の身を以て上田力を評す、豈それ當を得んやだ」

「そりやア何のこツてす」

「雪隠の糞蠅たまく窓より出でて空飛ぶ鷹を笑ふと一般、そもく和女などの心でね、この上田が進退舉止を窺ひ知ることが出来ようかといふんだ」

「あら、酷いことね、妾は糞蠅で貴方は鷹ですか」

「まア物の比喩が、そんなもんだらうよ」

「おや、おやく、しかし上田さん、あの七十圓といふお金を、どこへお遣りなすつたの」

「えッ七十圓」

「知ッてますよ、貴方が若旦那に對ッて、七十圓お借りなすつたことを、ちらと襖の隙間からね」

「こりやア怪しからん事をいふ女だ、乃公が必要あッて借りた必要の金を、貴様、下女の分際で無禮至極、入らざる詮議だ」

「いえ貴方、詮議なッて、そんな事むづかしい理由ぢやア御坐いませんがね、その穴を白狀なさらぬから、おたづね申しますの、下女風情は心得て居りますよ」

「心得て居りやア黙ッてろ、貴様が」

「しかしね上田さん、こりやア全く貴方の御爲ですよ、もし萬々一、をかした穴へでも、お捨てなさるやうな事があッては、折角これまでの御名前に、なるほど學問も智慧も萬事御立派な方に、ぶしつけな、妾なぞが申さずともこのツてすが、浮世といふものは、また格別、人間に魔のさすといふ事も御坐いますし」

「むゝさうか、ぢやアまづ深切に言ッてくれるンだな」

「誰が貴方、こんな惡まれ口を」

「いや、よく分ツた、分ツたがね、あの金は少々仔細あッて」

「さアその少々が大變です、一度が二度、三度、四度と重ッては、阿漕が浦に曳く網ですよ」

「はゝゝゝ、をりく柄にもない秀句を吐き居るわい、しかしお清君、心配するに及ばん、上田力は男だ、たとひ飢ゑて死すとも斷じて墮落しない覺悟だから、あの七十圓もさ、決して恥づべく厭ふべく怪しむべき不潔の場所へ使ッたんでないが、今

しばらく沈黙を守るの必要ありだ、ね、心に疚しからずんば百千の攻撃諺誣また何すれぞだ」

「ぢやア貴方、どうしても仰しやらないの」

「いはない、今こゝで君に言ふべきの必要を認めない」

「ほゝゝゝ、それでは妾から言ひませうか、實はね、其お金の落ちた先まで、ちやあんと知ツて居ますのよ、なるほど、お言葉の通り、をかした穴ではないこツて、義理人情にお迫りなすツた事まで」

「えゝ、どゝどうして」

「どうしてツて、そこは妾ですよ」

「ふむン、妙だな、ぢやア試みに當てゝ見ろ」

「いゝ、言ひません、今こゝで言ふべきの必要を認めない」

「認めない、こん畜生、乃公を嘲弄するな」

「燈籠駿河の名物、そんな事は儲おいて、全く知ツて居ますよ、しかし貴方が白狀なさらないから、妾が知ツてるだけ若旦那に申し上げて置きますワ、上田さんが七十圓の使ひ道は斯うくだと」

「こら待て、貴様が自分が思ツてる通りか通りでないか、まだ本人に聞きもしないで」
「ですから貴方におたづね申しましたの、もし妾が言ふこと、違ツちやア却ツて御迷惑だらうと思ツて」

「やア此女め、いよく困らせるな、よし、ぢやア乃公から直接、川上に打明けて仕舞はう、家鴨の啼聲で事實を間違はれちやア残念だから」

「さうくそれが第一の徑路です、それでは妾も今こゝで、ほゝゝゝ、お聞き申す必要を認めないといふもの、また貴方も妾に言ふべき必要を認めず、認めず同志で宜

「いぢやアありませんか」

「えッ早く歸れ馬鹿、こてくくと白粉などを塗りやアがッて、見られた面かい、その面ア、まるで石灰小屋の化物だア」

「御免下さいまし、これは生來で」

「生來、うまれつきに、そんな面があるもんか、そりやア生れ損ひだ」

「うまれ損ひぢやア御坐いません、親どもが産み損ひで」

「どうでも宜いから早く歸れよ、歸ッてくれ、頼む、どういふもんか乃公は、貴様に物をいはれると、忽ち神經に異状を呈して妙な心持になるよ、貴様は餘程ふしぎな女だ、堂々たる鬚髯男子をして猶かつ恐れしむ、殆どこれ一種の黴菌に等しいもんだな、石炭酸でも、ぶツかけてやらうか」

「いえ、もう貴方、どうか御無用に」

「ぢやア早く去れ」

「去りますよ」

「去らんか」

「去りかけて居ります」

其十

お清が馳せ歸ッて戦狀かくと注進せしかば、川上夫婦おもはず手を拍ちながら、天晴れ手柄と當座の褒美に半襟一筋、おしいたゞいて自己が部屋に退きし體、さながら凱陣の勇士に似たりける、

されば上田が直接この我に對うて、あの七十圓の委細を白狀せんこと、今日か明日かと待ち受くれど、力先生さらに其後は來らず、やうく三日目の朝、宿の老爺に一書

を持て來らしめぬ、半紙一枚に秃筆のなぐりがき一ぱい、その文にいふ、

心に疚しければ一金なほよく六尺の有髯男子を愧死せしむるに足る、されど萬金
また一婦の徳を害ふ能はざるものあり、乞ふ愚なりと雖も茲に七十金の故を以て
上田力を疑ふ勿れ、

婢、清なるもの叨りに我寓を襲うて言ふところ此七十金にあり、そもく君の命
か細君の意か將また彼が一個の僭越か、これを問うて後、我その七十金の委曲を
語らんとす、乞ふ、力を以て其恵に依りながら倒しまに其人を要するものとなす
勿れ、かの七十金を賜ふの時、すでに既に其散する所以を告げざるの約あり、
重ねて一言を呈す、願はくは上田力を以て財の用を恣にするものとなす勿れ、
また友を欺き自己を欺くものとなす勿れ、我もし虚偽の言をなさんとすれば、何

ぞ電光朝露に等しき人間生活の常に於てせん、正に死せんとするの一刹那、みづ
から欺くと共に天下後世を欺くべきなり、言を換へていは人の將に死せんとす
るや其言善しといふの時に於て我は大に人を欺かんと欲す、阿々、死際の虚言は
虚言で御坐なく候以上

上田力

川上兄足下

さすがの川上も一讀の下に、はツと思つて其まゝ上田が宿に走り行けば、力先生さら
に泰然として迎へながら、

「やア川上兄足下、曩に婢、清なるものが歸つて何と言つたね、彼女みだりに鼻頭の
下女辯を振うて僕の愚を輕にするの極、うまく言ひ詰め言ひ落した心算だらうが、

儲さうは行かないね、は、は、は、時に先刻の一書その末文が僕の本領だ、僕ア斯うして生きて居る間には決して虚言は吐かンぢやアないか、君、同じ人間同士が屁に似たる利害得失を案じて百年未滿の短日月間に自己を欺き人を欺くの苦策をめぐらさんよりやア、イツそ虚言をいふなら今や將に死センとするの一刹那、敵も味方も枕頭に寄り寄せて大に虚言を吐きたいね、は、は、は、その虚言たるや人に害なく世に害なく、また自己に疚しからずして却ッて碩徳智者が生きて饒舌る千萬言より重きを置かるゝの力あるからね、つまるところ決して虚言にならないよ、いはゆる上田力が虚言の秘傳こゝにありだから、安心し給へ、かの七十金のこと、はッはッはッはッはッ

天は汝を惡む、されど汝の病を憐れむとの一言に七十圓を添へて贈りし後、さても彼

奴が病狀、いかならん餘所ながら見てやりたし、お島といふ女も人には知らず黒田に取ッての貞女、機よくば再び逢うて慰めやりたしと、一日の夕暮、ぶらりと宿を出でて例の布子一點寒晒しの大兵を運びつゝ、遠くもあらぬ吉岡町たしかに此裏長屋と、背闇の星明りに窺ふ折しも、晝は流石に憚りてや味噌澆漿を破れ前垂に包んで路地口を立出でしはお島、何心なく過ぎ行かんとせしを、上田みるより聲を潜めて呼び戻しぬ、

「おい黒田の細君」

お島はツと申うて立止りしが、忽ち其人と知りけん、俄の小走りに駆け戻ッて腰を屈めながら、

「おや貴方、上田さんぢや御坐いませんか」

「むゝさうだ、黒田の病氣どうだね」

「いえもう貴方、お目にかゝって何から御禮を申しませうやら」

「これさ、餘計な事は聞くに及ばん、たゞ黒田の病氣どうだといふんだ、ちったア宜いかな」

「はい、有難う御坐います、何は儲置き、過日は貴方」

「いゝやさ、そんな事を聞きに来たんぢやアない、黒田の病氣」

「それが貴方、おかけさまで、お医者様にもかゝりまするし、また本人も男涙きに泣きまして、貴方の事を、妾もあれからは、あのやうな卑しい外へ出る稼ぎを止めまして、今では介抱かたぐ枕頭でマツチの箱を内職に」

「む、それでよし、醫者も醫者だが第一に本人の養生と傍に居るものゝ介抱が専一だ、全體、何と言つた醫者の診察は」

「はい、別に大した病氣でもないが、あんまり腦を使ひ過ぎた上に酒の故もあつて、

少々心臓に故障が、しかし氣を落ち付けて滋養物さへ」

「よし分つた、時に過日の金は、まだあるかね」

「どう致しまして貴方、あれを普通のお金などと思つては居りません、全く貴方の血を絞つて戴いたも同然のもの、やうくまだ三分一しか」

「なアに黒田に遣つた金ぢやアなし、病人に對する金、決して惜しんでは不可んよ、どうせ足りまいから其うち、また何とか工夫して、兎も角も、あの病だけは乃公が外から治すから、安心して、ね、ぢやア歸る」

「おや貴方、と申しても、また、御存じの通り、妾から伺ひかねまする只今の身分、せめて何うか、貴方のお宿だけでも知らして戴く事は」

「いけない、乃公が此家を知つてさへ居りやアそれで宜いんだ、萬事は黒田が全快の上だ、ね、こゝ一月ばかりの内に、もう百圓も工面して送るから」

「え、」

「なぜ驚く、無用の一文を得るの道は知らんが、必要に迫ッちやア千金なほ難からざる乃公だよ」

「でも御坐いませうが貴方、妾等夫婦のために、もし萬々一、御無理な事を」

「無理はしない、決して無理はせん、頑として愚者と一般の上田が蓬髮弊衣の一時に七十金百金を得たりとて怪しむやうでは、才氣迸發の黒田まだ一心の足らざるところありだ、これ等の事も實際に徴して全快の上、大に彼を諫める覺悟だ、は、は、は、は、は、は、時に病人の介抱も大切だが、また和女さんの身も大事だから、よく氣をつけてね」

「は、はい」

「風など、引くと不可ンぜ、いくら氣が確固でも女の身體だ、まして多年の苦勞に疲

れても居るだらうから、ね、なるべく用心するんだ、夫婦共倒れと來ちやア困るからな」

「あり、有難う、御坐います」

「ぢやア失敬」

「あの、上田さん」

「む、何だ、まだ用かね」

「伯父伯母とも達者に居りませうか」

「む、達者だ、いづれ乃公が引き合はして、うまく調和させる時もあるさ」

「何分とも宜しく願ひます、御免あそばして」

「おいよ」

また悠々として立去る上田が後影を、お島そツと星明りに透して伏し拜みながら、俄

起つもんだよ、この家鴨め」

「奥様、あれなんです上田さんは、いつも妾を捉へて家鴨々と仰しやるんですよ」

「え、喧しい、ぢやア其處に居て謹聴しろ、但し家鴨の分際で横合から口を出す事ならんぞ、元來きさまに頼むこつてないから、ところで細君、少々をかきな事を問ふやうですがね、和女ア紳士の令嬢として加之も一粒種に生育ツたから、定めし立派な衣類などを澤山お持ちでせうな」

「ほ、ほ、ほ、上田さん、妙な事を」

「いや決して妙でない、あるでせう澤山、あるへき筈だ」

「なに貴方、澤山御坐いますものか、父があを通りの頑固で、妾がまた構はない方ですから、たゞ暑い寒いを凌ぐだけですよ」

「は、は、は、寒暑を凌ぐに等差ありだ、とにかく和女は世間普通の婦人よりも多く持ッ

て居らるゝものと認定します」

「あらまア、そんな事を、それをお聞きなすつて貴方、どうなさいますの」

「そこだて、その餘分のうち、いはゞ目下不用の品で、あまり見苦しからぬもの、こりやア失敬、見苦しいものゝあるべき筈はないでせうが、まづ中等ぐらゐの小袖一枚を、頂戴したいんです」

「あれ御戯談を」

「いや更に戯談でない、眞實です、全くの御依頼です」

「だつて貴方、良人の着替とか何とか仰しやるなら格別、また御寢衣にもなりませうが、妾の、女の貴方、着古したものを」

「いや川上のは不可ン、是非とも和女の、それも只今こゝで願ひたい、あとから届けるの、持たしてやるのぢやア困るんです、ぢきく僕が貰ッて行きたい、是非、

なるべくは和女の目で、こりやア少々、高尙過ぎると思ふくらの縞柄が却って結構です、是非、是非ともね細君」

ましまるの盤大面に糸のやうなる細き目を釣り上げつゝ、片唾を呑んで差控へたるお清、此時こゝぞと進み出でて例の巾着口を絞りながら、

「あら奥様、お相手になさるから不可ませんよ、うツちやツて、お起ち遊ばせ、よう奥様、馬鹿々々しい、お構ひなさいますなよ」

「こら家鴨、控へろ、きさま横合から口を出さない約束だぞ」

「約束も嘆息もあるもんですか、戯談も事と品に依りまさアね、うかくなさると頭上から澤庵の糲味噌を、ぶツかけますよ」

「や此女め、また喰ツてかゝるな、こりやア細君との直談で、びよこく家鴨の這ひ出す幕ぢやアない、屋下の水ツ溜りへでも行けッ」

「いくら奥様と直談でも、この妾が許しませんわ、あんまり悪ふざけなさると」

「何が悪ふざけだ」

「何が無いもんだ、出来損ひの仁王様みたやうな怖しい顔をして、奥様の、女の着物物を呉れろなして」

「え、馬鹿め、乃公が着るンぢやアない、人に遣るんだ」

「おや、おや、おや、おや」

「おや、おや、おや、おや、おや」

「さア大變、いよく大變、大變々々怪しからんこツてすよ奥様、お聞き遊ばせ、貴方の御召物を取って往って誰かに着せるんですとさ、この上田さんが、いかな僣僕も反り返りますワ、おッ魂消て呆れて驚いてよ、あらまア押の強い事ツてば、づうづうしい」

「今日は川上に用が無いんだ、放せ、放せッてば、おや放さないね」

「放しません、貴方なンぞに遣るモンですか、過日のお金といひ、放しませんよ」

「や畜生、放さないと痛い目をするぞ、これまでの馴染甲斐に加減してやるモノの、もし間違ッて當然に打つと死んで仕舞ふぞ」

「さア殺して頂戴、さア殺して欲しいワ盗賊」

「盗賊ウ」

「晝盗賊」

え、面倒なりとお清が襟首を搔い擱んで、元來の大力そツと軽く抛け出せど、元來の肥ッてう控と重く倒れて忽然むくりと跳ね起きながら、こゝぞ護身の利器を用ふるところなりとや思ひけん、兩手の指の爪を磨ぎ立て上田の面體を覗うて飛び付くや否、がしくと引ッ搔きぬ、

「痛い畜生、こら放せ、痛いといふに」

「放して宜いものか、南瓜野郎」

其十二

市に三虎の諺、七十圓の金は彼が性質と彼が一書に依ッて更に怪しまざれど、我不在を覗うて妻に迫りつゝ、小袖二枚を提けて立去りしとは奇怪千萬、しかも妻と清とが左右より其時の景況さては其時の言葉かくと委細に聞き取りて、流石の川上三吉も今は小首を傾けぬ、

七十金を疑はざるは彼の七十金の必要を見ざりし以前の上田なり、されば七十金を我に乞ひし時に既に由來の上田にあらずして、小袖二枚を妻に迫ッて持ち去りし時の上田と一般、もし柳に雪折れなしとの下世話を思へば、櫂の木に似たる一本調子の彼、

或は人よりも意外に脆く折れたるにはあらざるか、金は猶ほ可なり、上田として女の
 小袖二枚は不思議の極、しかも聞けば眼前火急の用に供せんとするが如き體なりしと
 かや、上田が女に物を遣れないといふ論鋒どこから出ると叫んで怒りし如き、なるほ
 ど、いづれの道にも彼が露骨こそ却つて哀れなり、願はくば天生あれほどの男、あの
 まゝの變物として長く世にあらせたし、一見その愚は愚なるに似たりと雖も、時に或
 は人を驚かして殆ど剃刀の刃に等しく鋭敏なるところ、また常に氷よりも冷かなる人
 生觀を論じながら自己は火の如き情熱の燃ゆるところも、惜しや竟に浮世の惡魔に喰
 ひ去られて一轉さらに其門生たらざるか、そもく寒天の山河二百里を飛び來つて我
 を山中より迎へし彼を思へば、今ぞ誤つて岐路の闇黒に馳せ入らんとする彼を迎へて
 再び光明を仰がしむるものは我なり、もはや徒らに過去の彼を信じて將來の彼を放
 任すべき時にあらずと、川上三吉こゝに兩の腕を拱いて大の眼を閉ぢぬ、

こゝにまた吉岡町の裏長屋を我身の置き所として、多年の傲慢狂放も病のために殆ど
 消磨し去らんとする黒田健次、おもむろに枕を欹て、眉を蹙めながら思ふやう、友を
 悲しんで涙を分つは上田が性として怪しむに足らざれど、彼が身として一時に七十金
 を得たる手段の不思議さよ、しかも前夜の宵闇に妻を呼び止めて、なほ百金を贈るべ
 しいといひしのみか、今こゝに妻が衣手うすき霜夜の哀れを救はんとして、女の小袖二枚
 を人知れず抛け込みしは怪の怪なるもの、そもく奇の奇なるもの、いづこより得し
 か、何として得しか、袖のうつり香いまだ失せざるは古手屋の軒に吊せしとも思はれ
 ず、折目たゞしく濕氣なくして裾の揃ひし體は正に質庫の流れを求めしにもあらず、
 されば猶更ら以て奇なり怪なり、あはれ浮世に馴れざる剛直一片の武骨漢、もしや我
 疾病を救はんがための一念に驅られて前後の違もなく、かの玲瓏たる胸中に拭ふべか

岸に門戸を張れる倉橋幸藏、ふいと訪ひ來りぬ、
 汐入村に膝小僧抱き寐の昔を忘れて、去るもの日々疎く貧富また隔あるべき交際な
 らねど、何とせん劇職に繋がれて更に閑暇なき倉橋が身、上田また蓬髮弊衣の一書生
 をもて其境涯を害せざらんがため、殊更に逢はざること一月以來およそ四十餘日にも
 餘りぬ、

「やアお役人様が御來臨だな」

「は、は、は、は、その通り何分、俗務に縛られてね、つい無沙汰勝だ、時に上田、用が
 なきやア飯でも食ひに行かうか、久しぶりで君が牛飲馬食の快に接して聊か鼻につ
 いた吏臭を忘れたいんだ」

「いや、吏は飽くまで吏臭たれ、敢て忘るべからざるは、僕の今日なほ吳下の阿蒙を
 守ッて其愚を脱せざるが如しだ、故に川上の何處やら紳士臭きに傾きしを咎めずさ、

それは儲置いて牛飲馬食の快は何時でも辭せんよ」

「ぢやア直と出掛けようか」

「しかし何處へ行く」

「どこツて、まづ客分の君がお好み次第お望みのまゝ」

「いくら奢る」

「は、は、は、は、君なるかな君なるかなだ、いくらでも奢るよ、飲むと食ふぐらゐは大
 丈夫だから」

「そりやア月給取だから安心してるがね、まア幾何か、ちよいと其金高を聞かしてく
 れ、全體、君の懐中は今日どれほど持つてる」

「は、は、は、は、まア二十圓内外はあるだらうよ」

「ふむ、一人の友に一飯を興へんがため備ふるところ二十金たア流石に違つたもん

だな、しかし倉橋、君に一言きくがね、その二十圓を今日、僕に悉皆、奢ッて仕舞ッても構はない氣かな」

「奢るとも、全體、身體に暇さへありやア毎日でも奢るさ、二十圓づゝぢやア事實に於て續かないがね、君の飲食ぐらゐるは」

「僕の食ふぐらゐるッて君、場所にもよるし料理にも依るが、まづ中等として一度に二圓乃至三圓ほどは必ず」

「お安いこツた」

「二圓五十錢づゝとして月に幾度ぐらゐる奢ッてくれる、まアさ君の身に暇があるとしてさ」

「妙な事をいふね、はゝゝゝ三日に一度ぐらゐるとせう」

「一箇月に十度、二十五圓、これを四ヶ月として百圓、おい倉橋、乃公に百圓くれな

いか」

「百圓」

「敢て驚くべからず、君が僕を思ッてくれるの厚情、もし月に三度づゝとして七圓五十錢、これを一年として九十圓、この間に女中の祝儀を十圓と見積ッて百圓、不思議はあるまい、どうだ」

「むゝ」

「否かね」

「なアに、さうぢやアない、また君がために百圓を惜しむの意でもないがね、聊か別に思ふところあッてさ」

「思ふところたア」

「いや何、ぢやア百圓、あすの朝すぐに届ける、しかし上田、其百圓を何に使ふね」

「他なし、たゞ牛飲馬食に費すと思へば可なりだ」

「しかし上田」

「こゝに至つて君、しかし、などといふ曖昧模糊たる語氣は止せよ、なんだか百圓に怨靈が残つたやうで見苦しい、否なら否、應なら應だ、は、は、は、は、いは、君が月給の半分以下だアね、文句をいふなよ、まさか泥溝の底に叩つ込むぢやアなし」

「む、よし、ぢやア明日の朝きつと届ける」

「多謝々々」

倉橋幸藏そのまゝ、上田が宿を立出づるや否、車を飛ばして濱町の富田家に川上を訪ひつゝ、やア遣られた、遣られた、さかさまに遣られて來たとぞ笑ひぬ、川上おもはず眉を蹙めながら、

「やられた、君が上田にか、君が、あの上田に」

「さうさ、彼奴、汐入村の昔から妙な得意があつて、愚は其愚を守りながら愚中おのづから時に愚を用ひて巧みに人の道具外れを打つからね、なか／＼世間普通の才子よりも油断がならないぜ、大に與みし易からんところがあるから」

「評し得て妙、全くだよ、穿つた説だ、どういふ鹽梅に遣られた」

「どういふ鹽梅ツて、實に、くだらない、つまらない處から急所へ喰ひ付かれたのさ、最初、どツかへ飯でも食ひに連れ出して、鱈と一般、酒に痛めつけた上、きのふ君から聞いた怪事を白状させてやらうと思つたが、彼奴、容易に動かない、いくら奢るの、どれほど懐中にあるんだなどと、例の恍けた無邪氣から釣り込まれてよ、つい百圓やられた、しかし川上、明日ね、約束の百圓を彼に贈り届けて而して後さ、は、は、は、おもむろに計ありだ、聊か私に官を用ひるの嫌ひあるがね、幸ひ府下の祕

密探偵で内務省へ出入する奴があるから、決して上田の害にならないやう、僕が内命を下して、そつと百圓の道筋を探らして見る心算だ」

「面白い、面白いがね、大丈夫だらうな上田の一人身上」

「大丈夫、さらに心配無用、かりにも上田を傷つけるなんて、まぬけた奴ぢやアない、多年の老功、其道にかけちやア神の如しだよ」

「なるほど、ぢやアそれだ」

「あやまちの功名か、はゝゝゝゝゝゝ」

其十四

かくまで川上夫婦に疑はれたる今更、黒田が妻に約せし百圓の金、これを得るところ倉橋の外に無しと、人知れず工夫を凝らせる折しも、その倉橋が訪ひ來りしは殆ど天

の賜物、上田先生こゝを必死と斫り込んだる三寸の舌鋒に、忽ち思ひの外の功を奏して、その百圓は翌日の十時頃、一書に封ぜられたるまゝ内務省の小使が持ち來りぬ、上田これが請取の證として一通の返書を認めぬ、

御芳志の百圓、たしかに拜受いたし候、今日御歸宅の時刻を圖りて早速御禮かたがた推參仕るべき筈に候へども多年の御心易きに免じて御海容下されたく候つては、この百金、そもく今の小生身分として何のためにするかとの御不審あるべき筈のところは、いづれ他日を待つて委細に申し上ぐべき心底に御坐候間こゝしばらく御見遣し下さるやう偏に願ひ入り候、實は過日川上兄にも聊か御迷惑相かけ居り候折柄故、一入さらに心苦しく候へども、御承知の愚物なかく浮世の才子めいたる金錢瓦礫に等しき魂膽は無之候まゝ却つて御安心下さるべく

候さかちふ

倉橋さま侍史

つとむ拜はい

上田うへだこの百圓もくを懐中ふところに捻ぢねぢ込んで、其日そのひの夜よに入るを待ち受けつゝ、ぶらりと宿やどを立出いでしが、さて何なんとして與あたへんか、たとひ我われと知りながら今いままで忍しのんで逢あはざりしものが、俄にはかに訪とうて病やまひを驚おどろかささん心こころなき業わざ、さりとして彼かれがために再び得難えがたき救命きうめいの百金ひゃくを、見みず知らずの車夫しやふに託たくして證しょうを取らねば萬一まんの恐おそれあり、折をりしも彼かれが妻つまの外そとに出いづることあらば幸さいはひなれど、わざ／＼呼よび出いさば却かへつて恩おんを賣うるに等ひとしと、吉岡町よしかやちやうの宵闇よひやみを往ゆきつ戻もどりつ暫しばし彷徨さまよひしが、果はては思おもひ切きつて聲あしおと音を偷ぬすみながら、路次ろじへ入りて此家ここのぞと思おもふ破窓やれまどより洩もるゝ火影ほかげに差覗さしのぞけば、死しせざれど骸かはねの如ごとく横よこたはりて打臥うちふ

せる健次けんじが枕頭まくらもとに、妻つまは涙なみだの隙ひまよりマツチの箱はこを山やまの如ごとくに積つみ立たつる體てい、さながら浮世うきよの無慙むぜんを訴うたふるに似にたり、
上田うへだおもはず兩眼りやうがんを瞬しほた泣なきながら、紙かみに包つみし懐中ふところの百金ひゃくを取出とりだして、そつと窓まどの隙ひま間まより抛なげ入いるゝや否いな、頭かしらを縮ちぢめて中腰ちゆうごしに遁にけ出いしつ、路地口ろぢぐちに佇たいで窺うかがへば、やがて俄にはかに門かどの戸とを引き開あくる音おと、さてはと胸撫むねなで下おろして敵てきに追おはるゝ如ごとく一散さんに馳はせ戻もどりぬ、

最初はじめの七十金しちじゅうに驚おどろき疑うたが、二度目にどめの小袖こそでに呆あきれて怪あやしみながら、よもやと思おもひし三度目さんどめの百金ひゃくまた窓まどより抛なげ込まこまれしかば、さすがの黒田くろだも今は殆ほとんど茫ぼうとして病やまひを忘わするゝばかり、お島しまは猶なほさ更さらら嬉うれし涙なみだに咽むせびながら、夫婦ふうふもろとも一夜やを語かたり明あかせし翌日よくじつの朝あさ、門かどの戸との引ひき開あくるを待まち兼ねて一人ひとりの男をとこぬツと入いり來きりつゝ、四邊あたりじろく／＼見廻みまはし

ながら、

「前夜の九時ごろ、この窓から何か投げ込んだものがある筈だが、ありやア前以ての知己かね、またその品物を一見したい」

いひつゝ、差出せし名刺を見れば、南無三寶、姓名よりも本所警察署の五字まづ夫婦の賜を貰きぬ、

上田 力 (後編)

其一

こつくと石橋を鐵槌に叩いて耳を軟て小首を傾けし後、おそろく其中央を犬の如く四這ひに這ひ渡る奴もあれど、これはまた人間萬事を何の絲瓜とも思はず一切すべて面倒なりと、前途見すの一足飛びに飛び損ねたる例の黒田健次が、うき世の深水へ落ち込んで流れ流れし身の末を、やうく本所の吉岡町その裏長屋の歪める柱一本に取り付いて、しかも病みほうけたる瘦身に質草の種も盡き果て、泣面に蜂の巢の乾き切つたる境涯、このまゝこゝに飢ゑて凍えて木乃伊にならんとせしを、連れ添ふ妻のお島が皮も破れし古三味線を抱へて一文二文の手のうちに露命を繋ぐ淺ましさに、今は夫婦もろとも泣く音に弱り果てたる折しも、天は汝を惡む、されど汝が病を憐れむと

の一言に七十圓を添へて贈りしものは誰ぞ、我を生みし親にあらず我と血を分けし兄弟にあらず、一門の縁を結べる親戚にあらず諸は舊恩を施せしものにあらず、世に知られたる慈善家にあらず人に唄はれたる名聲家にあらず、且は千金これ軽しとせる富豪にあらず多年敬畏せし先輩にあらず、伏して教へを乞ひし師にもあらずして、何ぞや曾ては愚と稱し癡と卑しめ野暮と嘲り唐變木と罵り仙人殿と笑ひ、果は太古の遺物よろしく捉へて考古學者の一粟に供すべしとまで三年同居の朝夕に冷罵翻弄を極めたりし度外の鈍物、かの上田力が賜物ならんとは、此時さすがの男も思はず病める身を起して端坐しながら、窪める兩眼より瘦せ枯れたる頬に熱湯の如き涙ほろろと流しつ、正に大罪を犯せる如き我、こゝに慚死すべき筈の我を、彼なほ捨てずして我を思ふことの切なる、あはれ何をもて其萬分一に酬いん、さても我この病に臥して此まゝの窮巷破屋に死するとも、妻としてのお島あり、友としての上田力あり、さらに人間の不

幸なるものにあらずと、うまれ故郷の氏神に青痰ひツかけて國を飛び出せしより十年一日さらに屈せざりし黒田健次ほどの横着漢、こゝに感佩の腸を絞つて泣きぬ、されどまた思へば怖るべし恐るべし、そもく我この病は我一人を殺すがためにあらずして、かの玲瓏たる珠玉の如き上田が胸中に拭ふべからざる一片の汚點を附せざりしか、友を悲しんで涙を分つは彼が性として怪しむに足らざれど、あはれ浮世に反いて事に馴れざる彼が身として一時に七十金を得たる手段の不思議さよ、しかも其後また妻が衣手うすき霜夜の哀れを慰めんとて、何者の餘波ぞ袖のうつり香いまだ失せざる小袖二枚を人知れず投げ込みしは怪の怪なるもの、もしや我夫婦を救はんがための一念に驅られて前後の違もなく、過つて悪魔外道に導かれざりしかと、最初の七十金に驚き、二度目の小袖に怪しむ折しも、三度目には十圓紙幣十枚を紙に捻つて窓外の闇より抛け込まれしかば、夫婦あつと呆れて果は涙に咽びながら一夜を語り明せし翌日

の朝、門の戸を引き開くるや否、警察署の探偵と名乗りし男が入り來りて、前夜の九時ごろ此窓より何をか抛け込みしものありし筈、その品を一目見たしといはれし時、健次おもはず病める床より這ひ出でて宛がら死毒を舐めしが如き顔面を振り上げつゝ、さらに無し、一切知らずと言ひ放ちぬ、さらばまた改めて呼び出す事あるべしとて、夫婦が胸を貫きし探偵の聲音やうく長屋の路地を出でしと思ふころ、妻のお島そつと戸口に立ち出でて四邊を見廻し、うちには健次が男泣きの聲しのばせて齒を咬み占めぬ、

南無三寶、さては病める我こそ病に未だ死せずして、無慙や我を扶けんとせし神の如き其友を先づ殺したりけり、もし事あらば一門一家の親戚故舊百人を屠殺にするとも空嘯いて目色も動すべからざるほどの我、こゝに彼一人を罪として腸を引き裂くの苦

痛ありと、破れ蒲團ひつかぶつて其日一日は男泣きに泣き沈みし夕暮、妻のお島が涙の隙より豆ランプを取り出して火を點けながら、それにもあらぬ古箱に手細工の泥土を塗り込んだる火鉢引き寄せ、眞黒に煤けたる土瓶の下より埋みし炭團掘り起して消炭を吹き立て、をりく袖屏風に灰神樂を防ぎつゝ、やうく澁茶を湧かしぬ、

「ねエ良人、兎も角お茶漬でも、さう一日なんにも飲まず食はずぢやア不可ませんよ、不貞腐つて小面憎い悪度胸を極めるんぢやアないが、いくら今更ら陰で氣を揉んだつて別に仕方がありませんから、もし萬一の時、せめて我々夫婦が出るところへ出て、精一ぱい、あの方の罪を引き受けるより外に思案がありませんもの、あゝまるで演劇にでもあるやうだ、人の運命も落ち込めば落ち込むんですねエ、身から出た錆で身が難儀するばかりか、おもはぬ人様にまで迷惑をかけてさ、なるほど妾等夫婦の方から言やア斯うなるのが自業自得で當然のこつてすが、あの上田さんから

いふと實に氣の毒とも何とも申しやうのないこと、つまり世の中は神も佛も無いんですね馬鹿々々しい」

いひつゝ、そつと夜具の襟を持ち上ぐれば、古今の聖賢君子を煮顛ばして丸呑みにするほどの猛勢ありし横着漢も、今は自己まづ熱湯に煮られたるが如く弱り果て、やうやう青ざめたる顔を擡けながら、

「もう日が暮れたのか、流石の乃公も今日といふ今日は實に、まるツた、腸が丸廻するたア此こツた、あゝ浮世の残酷なる人事の慘澹たる、しみぐ身に染んで其極を知ツたよ、しかし今朝來た探偵ね、彼奴あのまゝだな」

「追ッて呼び出すとか何とか薄氣味の悪い事を言ひ遺して往ツたから、今日中に、どうかなるのかと思ツて、さんざ氣を揉んで居ましたがね、あのまゝで何にも」

「むゝさうか、そりやアそれとして、乃公が考へるにね、もはや此まゝ、此處には居ら

れないぜ、どツか巢を變へようぢやアないか」

「だツて良人、さう急に慌て、轉宅しちやア却ツて怪しまれる基で、結局ますく上田さんが」

「いや、そこは却ツて一策ありだ、決して遁け隠れをする意味ぢやアない、大びらに本所警察署へ出て、今朝の探偵が來た事をいふのさ、しかし其節お尋ねになツた事は一切さらに存じませんが、追ッて呼び出すとの御言葉が御坐いましたから念のため轉宅の場所を届けにまゐりました、別に御用は御坐いませんかと、逆に押し寄せ行くのが此方の一策だよ、もし警察が上田に對して實際、手厳しい最中なら直ぐ其場で何とか反應のある筈だからね、其時また其事に就いての臨機應變、そかア相も變らない乃公だよ」

「いえく、およしなさい、もう良人の一策とか一工夫とか臨機應變とか、そんな事

は眞平御免です、相も變らぬ乃公だよは猶更の事、ぞツとしますワ」

「おや妙な事をいふ、何故だ」

「何故ツて、さうぢやアありませんか、今のやうな病氣は格別、夫婦の慾目で見るぢやアないが、身の大事を取ツて世の中を眞面目にさへ渡りやア何處へ出しても立派な男一人前以上、こんなに落魄れて困る筈はないでせう、いくら物價が高くツて世間の景氣が悪いからツて其日ぐらしの職人が無事に妻子を過して居る今日、何です良人ほどの人が此ざまは、つまり蟹のやうに目が上にばかり附いて猿の手のお尻に廻らないからです、いつら一足飛びに山の絶頂へ飛び上らうとするのが良人の失策、その策略とか工夫とか臨機應變とかいふ奴が悪い蟲ですよ、それも自分が獨行の事で遣るなら、底の底まで承知で連れ添ふ妾と夫婦二人ツきりの難儀で濟みますが、あの上田さんといふ恩人に迷惑をかけて居る最中、わざ／＼警察を敵手にして一策

なンぞア、怪しからぬこツてす、もし藪蛇で仕損じた時は、良人どうなさる決心です」

「なるほど、さらに一言なし、眞實の事だ、しかし乃公の考案は、さういふ意味で言ツたのぢやアない、もし此ま、いつまでも貧と病に苦しんで此家に居れば居るほど、ますます上田に心配をかけて苦痛を及ぼし、つまり我々夫婦が慘澹の渦中に引き入れられるも同じこツたから、イツそ今のうちに巢を變へて影を隠すのが、せめて其恩に對する心の遠慮だらうと思ふのさ、實際、上田が逮捕でもされるといふ差迫ツた場合なら、何かう緩漫なもんかね、今の警察は」

「だツて良人、現在、探偵が来るほどですもの」

「そこだ、そこだよ、なるほど、最初の七十圓といひ二度目の小袖といひ、三度目の百圓に至ツては實に案外の案外、彼にしては怪中の怪、あまり出来過ぎた放れ業で、

おもはず首を捻った途端に不意の探偵と来たから、はッと思ッて驚いたのよ、しかもまた、つらく考へると、お島、やッぱり、こゝが上田だよ、さア山でも海でも押し寄せて来いと人事の一切を鼻頭で冷笑ッた乃公が却ッて愚で、いはゆる仙人殿といはれた唐變木の彼が結句の大智さ、能はざるにあらず爲さるなりといふ彼が平生の愚を以て、我々夫婦のため必要に應じたる智を用ひしものが即ち七十圓となり小袖となり百金となりし所以、あゝ過てり過てり、既に彼が友誼に感泣しながらなほ彼を疑ひしは實に我の及ばざるところだッた、すまない、いよく上田に對して慚愧汗顔の至極だ、なアに今朝こゝへ来た探偵は、ふいと前夜この邊を通りか、ッて上田が窓から抛け込んだのを見たからさ、別段これといふ仔細は無いのさ、もし上田に實際の怪しむべき點があッて追ひ廻すほどなら前夜その時に遁すべき筈はなし、また今朝こゝへ来た時、これだけの家だもの片手で探し出すも易し、我々夫

婦のうちを連れて往ッて詮議する道理だ、それが其まゝ、何の音沙汰ないといふは、墓原の柳を化物と見て驚いたも同然、馬鹿々々しい事さ、しかし此まゝ、此家に居ちやア此上なほ上田を苦しめるから、どツかへ轉宅しようといふのさ、幸ひにして贈りくれたる彼が賜物の百圓、この百金を以て黒田健次が生命の有無を卜すべしだ、百圓のあるかぎりは一意専心に養生して、全快すれば宜し、もし斃るれば天なり、お島、和女ね、上田に逢ッて宜しく言ッてくれ、憾むらくは生前の恩を報ずる能はずして、死んだとよ、いゝか」

「えゝ、何ですよ、また、そんな事を、達者ものゝ病ひ弱りといふが、良人は格別の弱蟲だよ、しツかりなさい、妾、妾が附いて居ますよ、妾が一念は兎も角、あの上田さしが深切だけでも、きツと届いて、よくなりますからねエ」

「妻としての和女あり、友としての上田あり、ぢやアよくなる心算で居ようかね」

「居ようかねエぢやアいけません、その筈で居ると仰しやい」

「居る、よくなる、きつと、よくなる心算で居る」

「ほ、平生、びちく跳ね返って居る時に、その百分一ほども心配氣のある人だと、かうはなりませんまいに、常は大風の吹いたやうな氣性で、病氣になると女子か子兒のやうに、まるで別の人間ですよ良人は」

「いや、何とも申しますまい、たゞ感謝々々」

「あれ、謝れと誰がいひました」

「だから謝っては居らないよ、しかし有難いといふのさ、ねエ、乗れば乗るべき玉の輿を打捨て、根の腐った野中の一本杉、いつ仆れるか知れない此、へッほこ野郎の乃公に今までの艱難辛苦、和女なればこそだ」

「え、病人だてらに、お世辭なぞいふもんぢやアありませんよ」

「ほい、また吐られたか」

「あれまた、どこの世界に女房が亭主を吐る奴があります、しかし、つまらない馬鹿馬鹿しい今更めいた世辭を仰しやるからですよ、鬼婆の空念佛とやらで、いくら口頭に奉られたって嬉しくは御坐いませんわ、それよりか妾の言葉を少しも反かないで、ちやんくと藥を飲んで養生をなさい、今日は少し氣分が宜いと言ッちやア、いや何が喰ひたいの飲みたいのと、全體そんな氣儘が出来る筈の病人と思ッて居なさるの、こりやア良人、いは上田さんが血の涙で拵へて下すった大切のお金ですよ」

「わかッてる、承知してるよ」

「ですからね」

「だから、わかッてるよ、以後は、たゞこれと女の命に隨ふのみ、決して乃公の我意

を立てないさ」

「さう、さうまた良人のやうに仰しやると氣の毒でなりませんわ、ねエ、運が悪くツて事が間違ツたり、其上かうして病人になツて在ラツしやればこそ、妾のいふことを、叱られるの、謝るのと、え、もう、どうしたら宜からう、じれツたい、世の中は嫌だことよ」

其二

こゝに上田先生かの力の君は例に依ツて例の如く悠々また寛々、兩國小泉町の二階住居を天地として六疊の一室に二十貫目の大兵を横たへ豆ランプの下に古昔の君子をも凌ぐべき無垢潔白の腸を押据ゑつゝ、現在その身を養はるゝ川上夫婦に疑はれ十年知己の友たる倉橋幸藏に怪しまれ、さては下女風情のお清が口の端に冷かされながら、

いよく平然として猛牛の角を螫す蚊ほどにも思はざる體、愚なるが如く智なるが如く其間に蟠ツて、たましく天井を仰ぎつゝ、呵々と笑ふ聲は獅子の吼ゆるに似たり、獅子なるかな、獅子なるかな、よしや時に誤ツて浮世の鼠輩に輕んぜられ、また或は事に當ツて聊か滑稽じみたる失策はあれども、敢て陰險なる猫の類にあらず利發めいたる猿の流にあらず汚醜の塊に等しき豚の派にあらずして、その一舉一動は悉く自己が眞情より溢れ出で、その一言一句は總て自己が肺腑より湧き出でつゝ、癡鈍なるが如くにして犯すべからざる英氣を蓄へ、茫として知らざるが如き中に自から大觀の風を備へ、五月人形の武者に似たる眉、鷹に似たる黒目勝の大目玉、唇端は夜具の袖に似たれど容易に開かず、鼻は其本體を現して香爐獅子に似たれど凡俗の手に觸れしめず、聳ゆる兩肩の山を怒らして鐵の楯に似たる胸板を突き出し、張り切ツたる腰骨の山石疊さは角力道に羨まるゝばかり、無心に立てる兩脚さへ地の底に根を持つかと疑はれて

身材五尺八寸、腹の太さ四尺二寸、蛆形の下駄を踏んで例のステツキを携へながら夕暮の空に何處を的もなく見渡しつゝ、のツそりと立ち出づる體は宛然たる古壯士の風采、天生その醜男よりも其立派さに見惚れて往來の人に驚かれぬ、

黒田健次そのものは飽くまで憎むべき奴なれど、その疾病や憐れむべし、その妻の心や憫れむべしと、上田が本性さらに人一倍の苦痛を忍んで、潔白の我身を多年の知己たる現在の恩人たる川上夫婦さては倉橋幸藏に疑はれながら、人知れず三度これを救ひし後の彼は仙とせし、世に捨てらるゝほどの子は猶も可愛き親心、新舊ともに呆れて誰一人の扶助なき友は猶も慘澹の至極ぞと、一日の夕暮、ぶらりと立出でて途上の思案とりぐ、やがて吉岡町のこゝぞと思ふ路地口より、あれでも良人は涙片手の世話女房が夜に紛れての買物にでも出で来るかと、例のステツキを小脇に抱へながら宵闇

の中腰に猪首を差伸べて續く長屋の奥を窺ふ體、浮世の義理人情でなるべき業が二十貫目の大男、さながら小兒の戯事に隠れん坊の鬼を探るに似たり、されど人の出で来る氣配なければ、せめて窓より家内の様子を差覗かんと、物を偷むが如く蹙音を忍ばせて、そろゝ路地の奥へ進み入りつゝ、此家なりけりと軒端に佇めば、いつも戸の隙間より漏れ来る火影なく寂として音もなし、まだ夜は更けざるに夫婦もろとも、はや眠れるかと思ひながら、さて戸を叩いて驚かすべき用もなければ、またもや其まゝ蹙音を忍ばせて立歸らんとする時、隣屋の戸口がらりと引き開けて出でしものあり、骨と皮なる瘦身代の此裏長屋にも賊といふものを恐るゝにや、はツと上田が姿に驚いて透し見ながら、誰だ誰ぞと咎めぬ、薄闇がりに蹙音しので入り込みし大兵の我、聲たてられなば面倒なりと、俄に小聲に會釋しながら、

「この長屋に黒田といふものが居りますか」

「黒田、そりやア隣家に住んで居た病人だが、二三日前、どツかへ轉宅しましたよ」

「や、轉宅、どこへ、何處へ移りました」

「どこツて、近所へも挨拶なしの唐突ですから、わかりませんな、しかし差配にでも行けば知れるでせう、差配ですか、そりやア田中といッてこの路地口から右へ四軒目の二階家ですよ」

「ありがたう、ぢやア其處で聞いて見ます」

さては黒田め、我に會はずべき面なしと恥ぢて去りしか、但しは我に此上の氣を揉ませまじとて去りしか、我は兎も角、我口より川上倉橋などの舊友に漏れては面目なしとて去りしものか、かつて我が棲む宿の主人を斯くぞと知らせしがため夫婦もろとも驚いて去りしものか、いづれにせよ、恩に狎れずして恩を謝し加之も恥を知ッて其身

を隠せしは彼奴いまだ腸まで腐らざりけりと、何とやら俄に一入の哀れを催しながら、聞き及びし差配の家に就いて問へば家賃こそ滞らねども其他に人知れぬ不義理でもあツてか夜遁け同然、壁一重の隣家さへ知らぬうちに去りしとぞ答へぬ、

恥ぢて去りしものを追ふは我が志ならねど、彼が疾病の経過いかなりしぞ、例の百金をもて眼前の急を救ふに足れども、さて其百金の盡きし後を何とかする、願はくは病の平癒と金の消費と伴へかし、病いまだ癒えずして金の盡くる事あらば彼の不幸、金いまだ盡きずして癒ゆれば彼の幸福、吉凶ともに天にあり禍福ともに命なりとはいへ、せめて其極を見たかりし、もし今こゝに去るならば我また別に思ふところあツて頂上の一針、彼が身の病は醫藥に託すれども彼が心の病は療治してくれんものを、なまなか病中の苦心を察し連れ添ふ妻が心に感じて、さらに一度も得逢はざりしは無念なり、さてもいづこへ往きしぞ、天生の才氣迸ッて物に屈せぬ奴ながら、あれほど

の病に臥して弱り果てたる身を今更ら運びし苦痛さぞや辛かるべく、また其良人を扶けて涙と共に立ち出でし妻が心の哀れさよ、かくと知らば不意に押し掛けて一時は枕頭を驚かすとも、言ふだけの事を言ひ聞くだけの事を聞きし後、親しく朝夕を訪うて介抱してやらんに、惜しき事してけりと、上田力おもはず兩眼をしばたゝきぬ、戀人の去りしあとならねど、何とやら哀れに床しう、もの失ひし心地して名残惜しけに立ち歸りつゝ、やうく我棲める小泉町の路地口に入らんとする折しも、日和下駄の音からころと近づきし提灯の火は正しく富田家の紋所、さては川上よりの使者かと思ふに其處に其まゝ佇めば果して例のお清、

「おや上田さん、今頃どちらへ」

「やア誰かと思ふに及ばず、地響き打って大道白の願け来るが如きは正に是はお清君たるを知る」

「あらまア相も變らず酷い事を仰しやるよ、しかし何處へ」

「何、どこへも行くンぢやアない、あんまり夕飯を食ひ過ぎたから二時間ほど散歩して歸つて来たところだ、時に用かね、用なら此まゝ此處で聞かう」

「はい、ちよいとね、もし御差支なくば、すぐ来て戴きたいンで、お迎ひにまゐりましたの、あの倉橋さんも入らッしやいますワ」

「ふん、倉橋が来て居る、そして川上が乃公に今時分、わざわざ迎ひに、ふむン」

「左様」

「いやだ」

「おや」

「今夜ア嫌だ、よしにする、また明日の朝にでもなッて気が向いたら行くと、さう言ッてくれ」

「だつて貴方、わざ／＼お迎ひにまるったんですから是非とも、倉橋さんが何だか頻りに、お待ち兼ねの御様子です」

「誰が待って居っても今夜は嫌だ、少々気分が悪い」

「ぢやア来て戴けませんの」

「然り」

「ほ、ほ、また妙なことを仰しやるワ、つい兩國橋たつた一條を渡れないほど御氣分の悪い貴方が、よくまア今ごろまで、てく／＼と二時間も何處をお歩きなさいましたの」

「え、うるさい、嫌だ、嫌だといふに、歸れ、婢、清なるものが叨りに嘴を容るゝところでない、歸れ」

そのまゝ打捨て、路地の奥なる我家に入らんとして振り返れば、お清また其あとにつ

いて入り来りぬ、

「おい歸らないか、今、言つた通りの返事をすれば宜いんだ、歸れ」

「いえ歸りませんわ、夜露を浴びて二時間も散歩なさるほどの御元氣で兩國橋を渡れないといふやうな辻褄の合はない御返事は出来ませんから、どうしても貴方をお連れ申しますの」

「こら下女、また叨りに狎れて恐れけもなく神聖を犯し居る、怪しからん女だ、這入る事ならんぞ」

いひつゝ、門の戸に音たて、閉ぢながら、自己が六疊の二階に走せ上つて耳を欝つれば、はや入り來つて宿の主人夫婦と語る聲すでに高し、

我にあらずんば眼前の急を免れ難き友のためには、よしや其友いかに平生の憎むべき所爲ありとも我これを捨つる能はず、されど我より以上の境遇にあつて我を要せざる

許へは、其人いかに恩人たりとも何すれぞ意を枉けて馳走するに足らん、事もし行か
 で叶はずば彼より来るべし、恩を記し恩に酬ゆるは人間また別に感謝の法あり、いた
 づらに起居動作の輕快を以て響きの聲に應ずるが如きは凡俗小人の常のみ、まして今
 夜は何とやら嫌なり、事すでに下女風情の口頭をもて迎へんとするほどの輕舉、何ぞ
 俄に差し迫りし彼我の大事なるべき、いざや寢てくれんと机の上の豆ランプを吹ッ消
 して、そのまゝ、押入の夜具を引き摺り出すや否、枕を取ッて鼾聲こゝに雷を欺くべき
 前口上、まだ無言の鼻息あらく野猪に似たり、
 折しも二階の梯子段みしくと音させて上り來りしお清が、まッ闇がりの中に立ッて
 鼻息する方に對ひつゝ、

「あら上田さん御戯談ぢやアありませんよ、全く何か貴方に御相談がある御様子で倉
 橋さんも御越しになつてるし、外のもんぢやア不可ないからッて妾が、わざくお

迎ひに來たんですから、是非とも、ねエ上田さん」

「やかましい、控へろ、將に君子が睡眠に就かんとする時は大智大徳の定座觀念に等
 しいくらるのもんだぞ、さるを凡俗みだりに犯し奉ッて何とする」

「だッて貴方、妾が困りますから」

「おぬしの困るぐらるで乃公が起てるもんか、失禮千萬な女だ、第一あの倉橋の如き
 は蒲鉾と一般、どこへ行くにも板の上に喰ッ付いて、自己が手足を勞せず自用車で
 馳け廻る奴だから用がありやア直ぐ此家へ來るが宜い、また川上夫婦の如きも夜陰
 わざく乃公を呼び寄せるほどの事なら下女風情が一片の口頭に託せずして正に一
 書を齎すべき筈だ、それに何ぞやといふ理窟は兎も角、何だか今夜ア實際に嫌だか
 らね、ひらに御免を蒙るのさ、沈黙々々、もう斷じて言語を交さないぞ」
 いひつゝ、寢ながら眼を光らして階下より反射する薄火影を見上ぐれば、お清さらに屈

せざる顔色、敵の内兜を見透したるが如き冷笑を含んで、家鴨に似たる尻を振りしは豫て覺悟の武者振ひ同然、じんわりと二階の上り口に坐しながら、そろく膝頭を漕いで枕頭へ近寄り來らんとする體に、鬼とも組むべき上田力おもはず夜具を打被つて五體を締めつゝ、

「おい、こら、貴様、ぶんなぐるぞ畜生、蹴飛ばすぞ」

「おいでも、こらでも構ひますもんか、今夜もし貴方が來て下さらない以上は、こゝで、此ま、泊めて貰ひますワ、御迷惑でも、お夜具の裾を借りまして、しかも妾は寢相が悪くツて夢中に顛け廻りますから、もし萬一、ひよつと貴方の衾中へ藻ぐり込むかも知れませんよ」

「いやはや此女め、呆れ返つた阿魔ツちよだ、驚き入つた女郎だ、づうくしいと言はうか、怪しからんと申さうか、實に言語道斷、叱するに言なく、處するに方なく

論にも齒にもかゝらない難物だ、所詮、度すべからざるの代物だな」

「それ御覽なさい、それほど貴方お困りなさるなら來て下さい、わざくお迎ひに來たのですから」

「閉口、降參、まるツた」

「ぢやア來て下さいませぬ」

「往くよ、往くツてば、直に行くから先づ階下へ降りて待ッてる、あ、酷い女だ、連も叶はない、無効々々、天下たゞ我の恐るゝところ君あるのみだ、實に剛敵と謂ひつべし、殆ど怪物だな、貴様は」

荒土の仁王に魂ひ宿ッて這ひ込むとも、ぐいと首骨を抱き占めて寢るほどの男ながらそろく近寄らんとせしお清が勢ひに恐れて飛び起きつゝ、やうく階下に降りて見れば、はや門口に提灯を携へて待ちぬ、

「さア上田さん、まるりませう」

「は、は、は、いよくやられたね、君に對しては以後さらに一言なし、乃公の權威す
でに地に墮ちたりだわい」

「今更ら文句を仰しやらないで、早く貴方、あんよをなさい」

「あんよ、あんよたア何だ、妙なことをいふね」

「ほ、ほ、ほ、お歩きなさることつてすよ、可愛らしい小さな其お御足で」

「や此女、すでに與みし易しと見て取つて、ますくふざけるな」

「これは失禮」

「失禮で濟むか勿體ない、苟も乃公に對つて」

やがて兩國橋を渡りながら前後を見れば、いつしか夜は更けたり往來の人も絶えて、
岸に臨める樓々櫛比の火影ちらほら流るゝ水に砕けつゝ、近くは橋下を漕ぎ行く舟の

櫓拍子さへ何とやら面白く、うき世の外の別世界あれこそ柳橋と思ふ方より戀の色香
は送らねど三味の音じめの幽に聞ゆる風情、さすがの上田も思はず歩を止めて振り返
りぬ、

「どうも宜いね、俗物が絶え間なく踏み鳴らして遠雷の響を聴くに等しき肩摩轂撃の
兩國橋も、かう夜が更けて殆ど其景物を一變したところ、俄に詩人めいて二州橋と

でも言はざるを得ないね」

「眞實ですよ、此兩國ほど塵埃ツほくツて往來の雑沓するところは御坐いませんが、
また夜が更けた景色は別ですね、それに月のないのが却つて何だか情が深いやうで
寂然としますよ」

「や、お清君なかく話せるわい、この兩國を賞するに川開きの花火でも持ち出すか
と思ひの外、月なきを以て更に一段とは、實に侮るべからざるの言だ、なるほど、

人は外観によらない詩趣のあるもんだな」

「ほ、ほ、ほ、久しい御馴染ですが、妙な事で始めて貴方に褒められましたワ、しかし上田さん、あれ、あれを御覽なさい、あれが龜清と柳光亭で、此方が生稻でせう、そして今頃まで好いた藝妓の爪弾で浮世知らずの微醉機嫌は全體どんな男でせう、かうなると女は無効ですよ、なぜ妾は男に生れなかつたらうと口惜しく思ひますワ、お金さへありやア自由自在の世の中とはいふもんの、女ぢやア少々困りますからね、貴方だつて上田さん、幸ひ男にお生れなすつたればこそ、もし女で貴方のやうな人が出来たら、どうでせう、随分と納めどころのない御荷物ですぜ、まア淺草の公園で女の力持か何ぞより外に用のない方ですから」

「いや此女め、ちよいと譽めると直ぐ附け上つて無禮の言を發する女だ、元來あの三味なンざア汚穢なる淫情を鼓舞するの樂器で、つまり俗界の鼠輩が喜ぶところだ、

また藝妓は鼠輩が玩弄物で、唯これ銅臭の多寡に依つて、媚嫵の輕重を呈するもの、その清淨無垢なる點よりいへば當時あの柳橋に、ありとあらゆる數百の美人が香粉の隊を組んで押し出してもお清君、君が一人の尊きに及ばないんだぞ、だから、あんなものを羨まずに、みづから信すること高くして確乎しろ」

「おやまア、柳橋の藝妓が總出で押し掛けて來ても、妾一人の方が上田さん、えらいんですか、あの妾一人の方が」

「さうだ、かの金殿玉樓に住んで肥馬輕車を驅る當世得意の奴等が千百の群をなして來ても、破帽弊衣の乃公一人に如かざると同じこつた」

「ぢやア上田さん、及ばざる如かざる同士で、いッそ貴方と妾と夫婦になりませうか」
 「馬鹿、かりに物の比喩を言ッて比較したばかりだ、實際に於ては、天地の差があるわい」

「ほ、ほ、ほ、眞平御免、妾の方から」

「や、また吐したな」

濱町の富田家に至りしころは夜の十二時、はや立關の戸は閉てたり、お清まづ入りて勝手口より案内せんとすれど、上田先生さらに動かす、

「おい、立關を開けんか」

「だつて貴方、もう夜が更けて居りますから、甚だ失禮ですが、どうか此處から、第

一お手間が取れますよ」

「いや手間が取れても構はん、開けろ」

「開けろと仰しやれば開けますがね、倉橋さんだつて夜が更けると此處から出入なさいますよ」

「だまれ、人の事はいふに及ばん、乃公は別だ、面倒なら歸る」

「まア意地のお悪いこと」

「はやく開けい」

お清そのまゝ奥に入りて通じけん、やがて立關の戸を開けて迎へしは川上三吉と倉橋幸藏、

「やアよく来てくれた、夜中に失敬だが、何分にも晝間は忙しい身體だからね、まづ今夜ア汐入村以來、久しぶりに三人が枕を並べて夜と共に語る心算さ」

「は、は、は、つまらないこつて夜中わざく、君子を引き出したね、しかし今更ら歸るのも面倒だ、ぢやア泊り込み、いや話し込むとせう」

三人もろとも奥の一室に打通れば、かねて待ち受けたる茶菓の饗應は勿論、殊更ら上田がために設けたる酒飯の用意さへ整うて、川上倉橋の二人が何とやら改りし慇懃さに、力先生じろく、見渡しながら、

「何は儲置き、この室に入るや否、忽ち乃公の鼻を衝いて堪へざらしむるものあり、は、は、は、は、實は今日、夕方ちよいと出てね、十時ごろ宿へ歸ったところが變に氣分が悪くツて面白くないのさ、まして彼、婢清なるものが例の氣焰萬丈で迎ひに來居ったから、え、面倒と夜具ひツかついで寢込んだ甲斐もなく、とうとう引き摺り出されたのよ、故に先生こゝに頗る空腹の體、まして夜と共に語らんとするに於てをやだ、あ、腹の蟲めが啼き居るわい」

「は、は、は、は、さうでなくツて君がために設けてあるんだから、さア遠慮なしに」

「ぢやア直ちに取かゝるよ、しかし談話があるなら始め給へ、かつ飲み且つ食うて以て應ずるからね」

いひつゝ用意の酒肴を取出して、傍らに人なきが如く自己一人悠々と坐の中央に大胡坐かきながら、脇目も觸らず前後の會釋もなく、むしやくと喰うては忽ち舌鼓を打

ち、がぶくと飲んで頻りに咽喉を鳴らす體、宛然これ一個の阿羅漢に似たり、

川上まづ膝を進めて言葉を改めながら、

「今夜アね上田君、汐入村以來の久しぶりで夜と共に語るの前、まづ君に對うて謝す

べき事がある」

倉橋また言葉をツイて、

「僕も同じく、君に謝らなければならん事があるんだ」

上田じろく、左右を見分けて、手に持てる大盃ぐつと飲み乾しながら、

「何だよ、變に改ツて二人とも、僕に謝するなんて、は、は、は、薄氣味の悪いこツた

ね、しかし兎も角その主意を聞かう、但し簡單々々」

「ぢやア大略かい撮んで話すがね、始め君が七十圓の必要、その後また妻の小袖、この倉橋からも百圓」

「む、あれかい、あの事かい、は、は、は、つまり其費途を疑って居たのが、何かの端から分つたといふんだらう、いや分れば其事で宜いさ、しかし、どういふ工合に分つたね」

「外でもない、甚だ濟まないこつたが、この川上と相談して僕が、ある警察の探偵に意を含ませてね、ちよいと探つて見たのさ、ところが何ぞ圖らん、君が信用を犠牲に供して、あの黒田がため」

「いや、それで宜し、其後をいふべからず、そもく汐入村で苦學難行せし五人のうち、あの黒田一人が根性骨の横に突つ張つた奴で、由來さしく我々に不快を與へた今日だから、まして彼が自業自得、別段その落魄に涙を注ぐべき價值もないがね、さて人生の尤も慘なるものは疾病で、病痾は善人悪人ともに苦しむところで、そこで天は汝を憎む、されど汝の病を憐れむといふ主意から兎も角、まづ及ふだけの事を

してやつたのさ、もし謝すべき點からいへば僕こそ君等に對して謝らなければならんよ、何となれば多年この上田が愚を憐れんで扶けてくれる君等に一言の相談もせず、しかも平生の賜物を割いて與ふれば猶かつ可なりといふべきところを、別途さらに其賜物の幾倍を強ひて竊に他へ運んだ始末、いは謀つたも同然の結果だからな、しかし輶鮒の急を救はずして枯魚を市に買ふの遺憾あらんかと思つての事さ、いやもう黒田は實に困つた奴だよ」

川上倉橋の二人いよく感に堪へたる體、

「して黒田の病氣は、どうだね、第一また君に對うて何と言つてる」

「ところがね、いまだ一度も逢はずさ、たゞ其妻なるものに様子を聞くばかり、また物を送るにも萬事そつと投げ込んでやつたのだからな、誰だつて直接その落魄を舊友に訪はるゝは餘り心持の宜いもんぢやアあるまいし、まして病中のこと、元來が

「負けぬ氣の彼奴が瘦我慢を驚かして其病痾を刺撃するの可可愛さうだから、一切すべて蔭ながら盡してやツたのさ、しかし今日、夕方ちよいと往ツて見るとね、彼奴すでに去ツて、どツかへ往ツて仕舞ツたよ」

「ふむンまだ例の癖が止まないな」

「いや今度のは例の癖ぢやアあるまい、いくら黒田でも少しは心に感じて、氣の毒に思ツたからだらう」

「だらうがね、彼奴が性として」

「いや居堪まらない理由が外にもある、殆ど一編の小説的に仕組んだやうな不思議の廻り合はせて實に奇な事があるんだ、しかし彼等夫婦のため僕は今こゝで言ふに忍びない、もし口を開けば唯一言、彼が妻を憐れむのみだ、なるほど最初は野合で出来た女だから、さらに容を改めて敬愛すべき點はないがね、あの容貌と才氣とを以て

世に求むれば所謂玉の輿は容易なるべき筈を、黒田が如き醜男にして加之も人事に不節調の行爲を極むる奴に伴うて、多年幾何の失敗に驚かず、由来さまぐの艱難に屈せず、轆轤落魄のあまり萬事こゝに休して其病に臥せる良人を涙片手に介抱する體、實に目も當てられん、風雨の晨も霜雪の夜も寒中の古拾一枚で破三味線を抱へながら、人の軒に立ツて唄ふ聲は正しく慘澹たる悲鳴と一般、そもく黒田のやうな奴が何として彼の如き貞婦を持つか、かの貞婦また何として黒田の如き良人を持つか、僕が殆ど一身の潔白を犠牲として同情を寄せたのは實にこゝだ、始めて兩國橋で出逢ツた時、その良人のために手を合はして流涕淋漓、どうか僕に今の境遇を訪うてくれるなといふのよ、この上なほ三年は是非とも見通してやつてくれと拜まれた時、さすがの僕も鐵腸ために寸斷さるゝの感があつたね、君等もまた他日あの妻に逢へば必ず黒田を責むる鋒刃が鈍るよ、是に於てか思ふだ、黒田は才機横

ふところ却ツて一興あり、鑑一文の争ひに爪を磨ぐ熊鷹老爺も老を忘れ慾を放れて酒に酔ひ花に戯れつゝ、家も庫も子息も證文も入らぬと叫ぶところ殆ど奇中の奇なり、さては蟲干同然に深窓の佳人も箱を出でて一年一度の笑を漏らす風情、乞食非人も一刻千金の春を我物として落花狼藉の夢に睡る風情、貧富貴賤の差別あるべきや唯これ春といふ花の徳、さらば我もまた其春を訪ひ花に謝して俗物の調子外れを見物せんと、上田先生いづこへ行くにも一片の理窟をつけて天地鬼神に恥ぢざるの勢ひ、時ならぬに一升飯を七分まで喰ひ込んで便々たる腹を叩きながら、ぶらりくと立出でぬ、兩國の河岸傳ひに厩橋を過ぎ吾妻橋を過ぎて、白髪三千丈的に唄うたる墨堤十里の雲か雪か、小梅橋上より見渡せば所謂調子外れの俗物ぞろろと打續いて花のトンネルを虻蟻の傳ふが如し、しかも人間の愚なる、古今の綺羅錦繡をあつめて身に纏ふとも散り來る一輪の花弁に如かざる花に對ひながら、老幼男女いづれも今日を晴と着飾

りて眼前の衣香扇影に得々たる體、や、いよく凡俗の天下、逆も度し難い奴等ぞと獅子ッ鼻に冷笑ひつゝ、色褪めたる茶褐色の罽廣帽子を阿彌陀流にいたゞいて、ところろと綻びたる薩摩飛白の綿入羽織に素肌のまゝの拾一枚、例のステッキを左手に携へ用なき右手を一文なしの懷中に捻ぢ込んで、いつもながら五尺八寸二十貫目の大兵山の如き兩肩を怒らして悠々と歩み出せば、今を盛りの花に映じて一際すぐれたる怪物、むかし叡山の荒法師に似たる顔面ぬツと群集の頭上に飛び出でて、美人は怖れ小兒は遁け出し爺婆おどろいて酒亂の奴まで思はず道を譲りぬ、三圍の鳥居わづかに土堤より差覗いて夕暮の名に負ふ待乳山に對ひつゝ、一葉の舟に棹さして見返る竹屋の渡頭も、今日は花に溢れし人浪を打って平生の風物さらになく、牛の御前、長命寺、柳畑の裏田甫より白髯社頭の本道まで唯これ花と酒との合戦、人と唄とに亂れ狂うて隙間もなき其中を、おのれ獨占の天地に等しく上田一人ぬツと肩

より以上あらはれたる後姿に、折しも川上の妻女が一目に其人と見て例のお清を振り返りながら、

「ねエ清、ありやア上田さんだよ」

「おや眞實、上田さんに違ひ御坐いませんわ、こんな雑沓の中で見ると常よりも大きい圖抜けさが取別けて目立ちますことね、あらまア威張り返ッてさ、あの肩幅を御覽遊ばせ、しかし妙なもんで御坐いますね、あんな變屈な人でも春は善い心持と見えて、つい我しらす浮かれ出したのですよ、ほゝゝゝゝ」

「和女、ちよいと駈け出して、後背から不意打をしておあけよ」

「いけません、およし遊ばせ、あんな人ですから、どこでも構はずに破鐘のやうな聲を出して、やア家鴨の花見かなぞと吐鳴られちやア貴女、いくら妾だッて、きまりが悪う御坐いますから、觸らぬ神に崇なし、知らない振をしてまゐりませう、あの

通り首から上が飛び出して人の頭ばかり見て居ますから、この混雑の中で見付けられる氣遣ひは御坐いませんよ」

「だッて折角、かう知ッて居ながら黙ッて居ては悪いよ、また上田さんのこッたから、どうせ御不自由だらうし、幸ひ三人で、どッか人の知れない料理屋へでも、ねエ清、花も宜いが、こんな歩いてばかり居ては、草臥れてならないよ」

「なるほど、それも然うで御坐いますね、しかし妾では不可ません、恐れ入りますが貴女ちよいと、いくら上田さんでも貴女には、まさか人中で悪まれ口も」

「ぢやア清、少し早くね、追ひ附いて背後から驚愕さしてあけよう」

人なき大道ならば横行濶歩の上田なれど、かくとも知らねば悠々また寛々、此方は混雑を摺り抜けて女の小歩ちよこく、やうく追ひ附いて妻女まづ其脊を叩けど、葶殻もて磐石を打つが如く更に感ぜざる體、再び押せども應へず、三度そツと突けども

猶知らねば、お清しきりに妻女の袖を曳いて目配せしながら、思ひ切り捻ッておやり遊ばせといふ、されどこの往來でと躊躇ふ顔色に、お清おもはず進み出でて、平生の敵討この時なりと満身の力を指頭に込めつゝ、五斗俵に似たる臀の邊りを爪と爪とに挿んで、ぐいと捻りあぐれば流石の上田も驚いて振り返りざま、何者と思ひの外なる川上の妻女とお清、ほゝと笑うて、

「おや上田さん」

「むゝ誰かと思ツたよ、やア家鴨も來て居るな」

お清ふツと膨れて四邊を見廻し、顔を赧らめながら、

「上田さん、こゝは混雜ですよ」

「はゝゝゝゝゝさうだツたね、こりやア悪かつた、時に今日は大變な人出だな、しかし此奴等ア皆、花を見に來たンぢやアない、一年一度の大酒うち喰ッて酔ッぱら

ひに來せた俗物どもだから困るよ、中には随分よくない悪戯な野郎があるから氣をつけなさいよ、第一こんなところへ若い女二人で來るといふことがあるもんか、聊か淑徳を缺くの虞れありだ、また來るなら車夫か書生でも連れて來れば宜いに、しかし幸ひ僕の背後に附いて居れば大丈夫、はゝゝゝゝゝ」

さらぬも一際すぐれて目立ちし大男が、四邊かまはぬ傍若無人の大聲に叫んで笑ひ出せば、いづれも驚いて其顔を打守りつゝ、川上の妻女も人中で叱られたるが如き心地して思はず差俯きぬ、

お清いよく不平の顔色、それ御覽遊ばせ、時も場合も遠慮會釋のあるべき人かと、今更ら怨めど悔めど詮方なければ、一時も早く人なきところへ連れ出し酒で殺して置いて遁け出さんとの計策、

「ねエ上田さん、貴方どこまで、入らツしやいますの」